

# 第4部 アルメイダ関係資料

## — 豊後府内(大分)編 —

Session 4: Almeida-Related Materials —Bungo Funai (Oita) Edition—

### イエズス会日本書翰集関連資料(抜粹)

本資料編に収載する史料は、東京大学史料編纂所より刊行されている『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』からの関係部分を抜粋し、編集したものである。

#### ■11. 豊後の病院 府内病院

1559年11月1日(永禄二年十月二日)付 豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰 (部分)

[fol. 164r] Nesta povoação de Bungo temos 2 campos, scilicet, ho debaixo em que no principio se fez huma casa que servia de igreja, he agora hospital dos doentes de boubas e de todo o outro genero de chagas. E loguo de frente [deste se fez] de este ano de 1559 huma casa grande para outro genero de doenças de madeira assentado sobre pedras. Tem seu altar no meyo, acabou-sse vespora da visitação e no dia da festa se dixe nelle a primeira missa e pregação com muyta alegria e festa dos christãos, porque se ajuntarão todos e hum delles deu de comer a todos os outros. E tem de huma banda e da outra 8 gasalhados, quando ouver muita gente podem-sse agasalhar 16, com suas portas, e cada hum fechado sobre si. Tem esta casa, logo pegado hum gasalhado para o físico que a de ter cuidado dos doentes. Tem [ao] derredor huma varanda em que vem todos os enfermos a vista de todos e ahi se curão todos para tirarem ocasiōens. Ysto quanto aos que são de chagas, e as outras mezinhas de fisica, ha hum Japão velho que tem cuidado de lhas dar a seu tempo. He esta obra huma pregação continua que soa ate o Meaquo , donde está a cabeça dos Reis de Japão e Sacay que he como Veneza e Bandou onde está o estudo geral, e Fiançima onde está a cabeça dos bonzos. De todas estas partes, corre a fama do hospital

Deste verão, para que são curados de toda a maneira de doença, de sorgia de phisica, mais de 200. Abrio o Padre a porta a todos e vem todos os desemparados e incuraveis e as doenças que se curão en que o Senhor obra, he impossível obrarem as mezinhas, em huns de 60 annos ou mais, de muitos annos para cima comidos de cançre e afistelados.

※訳文については26ページ「11. 豊後の病院(府内病院)」を参照

東京大学史料編纂所2011.3『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原文編之三』より

本資料編の典拠とした文献は、以下のとおりである。

東京大学史料編纂所1990年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原文編之一』

東京大学史料編纂所1991年12月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譚文編之一(上)』

東京大学史料編纂所1994年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譚文編之一(下)』

東京大学史料編纂所1996年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原文編之二』

東京大学史料編纂所1998年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譚文編之二(上)』

東京大学史料編纂所2000年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譚文編之二(下)』

東京大学史料編纂所2011年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原文編之三』

東京大学史料編纂所2014年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譚文編之三』

東京大学史料編纂所2018年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原譚文編之四』

東京大学史料編纂所2022年2月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原譚文編之五』

東京大学史料編纂所2025年3月『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原譚文編之六』

引用および表記について

略記法: 本資料編では、上記の典拠文献を以下の形式で略記する。(史料編纂所 2000『譚文編二(下)』: 72ページ 書翰90)

この表記は、\*\*「東京大学史料編纂所 2000年刊行の『譚文編之二(下)』の72ページに掲載されている書翰90」\*\*を出典とすることを示す。書名は、巻構成の異なる『原文編』『譚文編』『原譚文編』の各名称を略称として使用する。

小タイトル: 資料中に付した小タイトルは、原則として典拠文献の注釈の表現に基づいている。ただし、資料の内容把握を助けるため、編者において適宜、追加あるいは追記したものがある。

## I. 育児院に関する記述

### ■1. 間引の悪習 ポルトガル商人ルイス・デ・ア ルメイダ育児院を設く

1555年9月20日(弘治元年九月五日)付、平戸発、バルタザール・ガーゴのポルトガル国王ジョアン三世宛書翰

この人びとの間に行われる悪事のなかに、養育の苦労あるいは貧困のために子供が生まれるとすぐに殺してしまうことがあります。それで、今年ルイス・ダルメイダ(○ルイス・デ・アルメイダ)という一ポルトガル人が(世俗から)引き籠ってイエズス会の靈操をするためにこの豊後に滞留するようになりました。彼はこのことを聞いてすぐに心を動かし、1,000クルザードをそのために提供しました。そして、何人も幼児達を殺さず、そのために設ける一病院(○育児院)に密かに彼等を連れて来るべき命令をなんらかの罰則のもとに発令してくれるよう、私達が太守に請願することを(彼は求めました)。貧しいキリスト教徒の乳母数名、牝牛二頭とその他の物品をもって、幼児達が餓死することのないようにするためです。幼児達はそこに入れば程なくキリスト教徒になるでしょう。

(史料編纂所2000『譚文編二(下)』: 72ページ 書翰90)

### ■2. 間引き

1555年9月23日(弘治元年九月八日)付、平戸発、バルタザール・ガーゴのイグナティウス・デ・ロヨラ及び他のイエズス会員宛書翰

こうしたことの他にも、これらの日本人はその他の悪事に加えて、多くの者が貧窮と養育の労苦のために子供が生まれると(すぐに)殺してしまいます。今年、当地にたまたまロイス・ダルメイダという名の、いつも立派な行ないをしているポルトガル人が滞在していました。

(史料編纂所2000『譚文編二(下)』: 81ページ 書翰91)

### ■3. ルイス・デ・アルメイダが1,000クルザードを寄進する

1555年9月23日(弘治元年九月八日)付、平戸発、バルタザール・ガーゴのイグナティウス・デ・ロヨラ及び他のイエズス会員宛書翰

彼はこうした魂の失われるのを知ると、心を動かされてこのために1,000クルザードの寄進をしました。私達は、時々習慣しているように、その日私達の修院にやって来た当地の領主(○大友義鎮)にこのことを話しました。そこで、それ以降に生じていた善事の理由をいくつか挙げた上で、いかなる者も幼児を殺してはならず、私達が設立する病院(○育児院)にひそかに幼児を連れて来るようにとの命令をなんらかの罰則つきで発令するよう、私は彼に求め、そうすれば私達が彼等を育てるであろうし、彼等が飢えて死ぬことのないようにできるような方策が見つかるであろう、しかもたとい死んでしまうことがあっても彼等の魂は良き場所に行くことになるであろう、と言いました。

(史料編纂所2000『譚文編二(下)』: 81ページ 書翰91)

### ■4. 大友義鎮、育児院設立を支持す

1555年9月23日(弘治元年九月八日)付、平戸発、バルタザール・ガーゴのイグナティウス・デ・ロヨラ及び他のイエズス会員宛書翰

彼はたいへん喜んで、自分はそれ(○間引き)が大きな罪であることを知っているので、私達が望むような方法で実行されるであろうと[言いました]。私がこうしたことを貌下に書き記すのは、この事業がキリストの慈悲によって始まっているその他のことと共に実現するよう神に懇願していただくためです。

(史料編纂所2000『譚文編二(下)』: 81ページ 書翰91)

## ■5. ルイス・デ・アルメイダの善徳

1555年11月23日(弘治元年閏十月十日)付、マカオ発、メルシオール・ヌーネス・バレトのインド、ポルトガル及びヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰

[いとも親愛なる兄弟達よ、私は私達の主を讃め称えるために、あなた方に一つのことを特にお話しします(○アジュダ図書館の古写本により補う。)。]ルイス・ダルメイダという名の、当地方でよく知られた人物が、本年[一隻の船で(○アジュダ図書館の古写本により補う)]日本に行きました。[その人物は豊後に行って、そこでパードレ・パルタザール・ガーゴに会いました。そして、その地で行なわれている悪習、すなわち貧しい婦人連が出産し、その息子達を敢えて扶養することができない時には、生まれると彼等を殺すことを知りました。彼とパードレ・パルタザール・ガーゴは豊後の国王(○大友義鎮)に話しました。この国王は子供と乳母を与えることを保証し、前述のルイス・ダルメイダは養育費を出すことを引き受けました。

(史料編纂所2000『譚文編二(下)』:152ページ 書翰95)

## ■6. 育児院建設

1556年1月7日(弘治元年十一月二十六日)付、マラッカ初、ルイス・フロイスのゴアにあるイエズス会員宛書翰

貧しい家に子供が生まれると、貧乏人は救済を得られないし、貧しく惨めに生きるための人生は必要ないと言って、すぐさま殺すか、産婆に首を踏みつけさせています(○間引き)。この若者(○アルメイダ)はもう一軒の家を建て、このような者達に子が生まれると、彼等が殺さないうちに、どうか彼等にその子を彼に託して欲しいと懇願し、そこで彼が後に教育し、生きる手立てを見つけてやろうと養育させています。彼は自ら、キリスト教徒や異教徒に対して、まことに良き例として模範を示し、大変道徳的に生活しております。パードレが日本へ着けばキリスト教界にすばらしい結果をもたらすでしょうから、これで準備を整えてすぐ日本へ向かって出発していただきたいと強く頼み、[彼は]シナのパードレ・メストレ・メルシオールの許に2,000クルザードを送りました。彼はイエズス会には受け入れられていないものの、信仰からこうしたことを行っているようです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:16ページ 書翰101)

## ■7. 日本人の慣習(嬰児殺しのこと)

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

当地の人びとの間では、罪の中でもとりわけ身の毛のよだつものがあります。すなわち、子供を殺すことです。人びとが言うには、子は多く必要とせず、家を存続させるためには一世代につき一人か二人で十分であり、それより多ければ貧しく悲惨な暮らしになるということです。また、後になって貧しく暮らすのを絶えず悔やむことに比べれば、子供を殺すことによる痛みは一時にも及ばないとのことです。彼等は、子供を養う余裕がないから殺すのです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:71ページ 書翰106)

## ■8. 飢饉の際の嬰児殺し

1560年12月1日(永禄三年十一月十四日)付、ゴア発、ゴンサロ・フェルナンデスのリスボンにあるロレンソウ及びディオゴ宛書翰

当地では、異教徒達は飢饉の際の習慣として、女性が子供を産むと、それを取り上げて[浜辺(○底本には「広場」とあるが、科学学士院図書館及びポルトガル国立図書館所蔵の古写本により訂す)]へ連れて行き、その上に石を置きます。そうして波が来ると、その子を連れ去ります。彼等を養ってくれるわけではない者を、何のために育てなければならないのかと(言い)、それ(○嬰児殺し)を正当化しています。

(史料編纂所2018『原譚文編之四』:42ページ 書翰133)

## II. 府内病院に関する記述

### ■9. 病院の建設

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

数日を経た後、バードレ・コスメ・デ・トルレスは、ある種の事柄について国王(○大友義鎮)に話すためにジョアン・フェルナンデスが必要となり、彼を呼び寄せるよう命じました。それによって諸事をさらに進展され、主への讃美とするためでした。私達には病院を建てるのが良いと思われましたが、それは彼等の間では新奇なことです。なぜなら、彼等はそれが良いことだと知ってはいますが、貧者と交わるのを、穢らわしく卑しいことと考えているからです。私達はこの件について国王に話しました。彼は、すでにそうすることを自ら決心していましたが、機会がなかったから実行しなかったのであり、(病院の建設を)大いに喜ぶ(と言いました)。私達は直ちに実行に移し、今教会がある地所に隣接し、かつての教会があった土地に建設しました。私達はそこに二室を有する大きな家屋一軒を建てました。すなわち、一室は容易に治療し得る傷や病気(の患者)のためであり、この部屋の奥にあるもう一室は、当国に極めて多い癩病患者に充てるものです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:55ページ 書翰106)

### ■10. 豊後の病院の様子

1557年11月7日(弘治三年十月十七日)付、豊後発、コスメ・デ・トルレスのイエズス会員宛書翰

(豊後の)国王がバードレ・パルタザール・ガーゴに与えた土地を、私達は二つに分けました。一つは死者のために用い、もう一つは国王の許可を得て病院が建設されました。国王と土地のすべての人は、とても満足しました。その病院内には、二つの部分があります。すなわち、一つは当地に大変多くいる癩病患者(leprosos)のためのものです。もう一つは、他の病気のため(のもの)です。当地において、私は、治療の才能があり、それをうまく使いこなすことができる、善良な一人のイルマン(○ルイス・デ・アルメイダ)を迎えました。この者は、一日に二回、治療行為を施します。また、イルマンのような大変熱心で善良な一人のキリスト教徒の日本人があり、彼も同じことをしています。誓願を立てている一人の日本人イルマンは、村々や市で、病人を助けるため、最も必要とする者には薬を供し、施しを分け与えています。というのも、彼等は大変貧しい人であるからです。

私達がキリスト教徒に改宗するために用いる第一の方法は、次のようなものです。まず、彼等を自分の無知を認識するよう導き、彼等の間違いを取り去ります。その後、彼等に(次のことを)知らしめるようにいたします。(中略)1557年9月6日(○弘治三年八月十四日)に、国王は私達の修院にやって来て、とても満足した様子で、そこで夕食を共にしました。夕食後、彼は大変よい行ない(○施し)をいたしました。それは正義と慈悲の行ないにより、彼の領国が拡大したからであり、…。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:113-115ページ 書翰108)

### ■11. 豊後の病院(府内病院)

### 1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

当豊後の集落に私達は二つの地所を有しています。すなわち、(そのうちの一つは)下の地所で、ここには当初一軒の家屋を建てて教会としましたが、現在は伝染病の患者やその他あらゆる種類の傷を負った者の病院になっています。そして当1559年、そのすぐ前に、他の種類の病気のために石を土台とした木造の大きな家屋一軒が建てられました。中央には祭壇が据えられ、聖母訪問の祝日(○1559年7月2日、永禄二年五月二十七日)の前日に落成し、同祝日にその中で最初のミサが挙げられ、大変な喜悦をもって説教が行なわれ、キリスト教徒達の祭りが行なわれました。というのも、皆が集まって、彼等のうちの一人がその他すべての人に食事を提供したからです。(その家屋は)それぞれの側に八つの宿房を購え、人(○患者)が多い時には16名を収容することができ、各室には扉(○襖障子のことか)があり、それによってそれぞれが独立して閉まった状態になります。この家屋には、患者を世話する役目の医者のために、一つの宿房が隣接してあります。(家屋の)周囲には、あらゆる患者が衆人の眼前に出てくる広縁が一つあり、そこで機会を得て皆治療を受けます。外傷患者やその他の内科の薬品の調合のために一人の年老いた日本人がおり、適宜それらを与えることに専念しています。この事業は、日本の諸王の首領(○天皇または将軍を指す)がいるミヤコ、ヴェネチアのような所である堺、公立の学問所がある坂東、仏僧達の長がいるフィアンシマ(○比叡山を指す)にまで伝わるほどの、絶え間ない説教となっています。これらすべての地域において、病院の評判は広まっています。

この夏以来、二〇〇人以上が、あらゆる種類の外科や内科の病気の治療を受けました。パードレはあらゆる人に門戸を開き、寄る辺のない身の者や不治の病人が悉く訪れました。病が癒えるのは主の御業によるもので、六〇歳乃至それ以上で、長年にわたり癌や腫物に冒されている者を薬で治すのは不可能です。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:265ページ 書翰122)

### ■12. 治療と改宗

#### 1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

病院の(入院)患者が治療される時には、院外からも多数の人がその時刻に訪れます。必要な人には投薬し、彼等は家に帰ります。入院中、彼等は喜んで祈祷を学び、治癒して退院するとしばしば戻ってきて、その意志と情熱を確認すると、洗礼を授かる者もいます。現在のところ、このような方法で人びとは改宗し、(○以下、この文の終わりまで、エヴォラ版では省略されている)平日にはいつでも、さらに日曜日には数人が、キリスト教徒になっています。そうして、精神的及び世俗的な慈悲の行で、彼等は修練されます。これらの病院と数軒の奉仕者達の住居は下の地所にあり、教会は上の地所にあって、そのあたりは草木に囲まれ、こうして私達は(俗世から)身を慎んでおります。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:266ページ 書翰122)

### ■13. 豊後の病院(府内病院)

#### 1559年11月20日(永禄二年十月二十一日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのイエズス会員宛書翰

病院は大いに発展しており、それを維持する病院への寄付もまた同様に(増えています)。昨年、寄付として300クルザードが与えられ、当地(○豊後)の一人の女性(○クララか。第122号文書参照)もとは勧進比丘尼だったクララが、150クルザード以上の寄進を行ったとある)だけで、100クルザードを寄進しました。これらの寄付によって多くの貧しい者が救われており、それらが消費されると、何事にも不足が生じないように、主はそれを増やしてくださいます。

当病院には日本人のイルマンが12名おり、うち2人は毎年その(病院の)世話をしています。本年奉仕する者は、ペドロ及びパウロという名で、しかるべき方法で務めているので、本年私達は彼等を交代させないこととしました。病院には如何にして患者を受け入れるべきか、そして喜捨を使うべきかについて、規定があります。

## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

(史料編纂所2014『譚文編之三』:328ページ 書翰125)

### ■14. 病院の情報(府内病院の運営)

1559年11月(永禄二年十月二日～十一月二日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのメルシオール・ヌーネス・バレト宛書翰

病院の事業は、しかるべきミゼリコルディア(○慈善)の事業が当地には存在しないために、日本の全域にとって小さからぬ鐘となっています。それがないのは、彼等の中に多大な喜捨をする者がいないためではなく、私が聞いたところによると、人びとが喜捨を与えることができるよう、それを請うて歩く者がいるためです。しかし、彼等は治療の方法、とりわけ外科医術を知りません。これらの疾患を殆ど治癒不可能なものと考えており、私がこれまで見た中で、完治するに至った者は一人もいません。主の思召しにより私達の薬が彼等に有効であるのは、驚くべきことです。15年、20年と病に罹っていたこれらの多くの人の大半は、30日乃至40日で健康になります。かくして当病院には、50乃至60レグアのところから治療にやってくることから、その噂はすでにミヤコにまでも広まっています。あまりにも病人の数が増え、そして今後もそうであるので、病人のための小室を備えた一軒の大きな家屋と、健康な人びとのための当家屋を整備する必要がありました。それは病院の喜捨によってなされ、総計130クルザードかかりました。貴人達や土地の重立った者達の(帰依する)仏僧達が治療に訪れます。この夏、これらの大病から60名を超える人達が快復しました。私はしばしば修院の召使い達に助けを借りる必要があります。彼等は日本人であったりインド人であったりします。そして多くの日には6、7人の人びとが治療に当たり、夕食の時間を少し過ぎた頃に(治療を)終えたものです。

多くの人が、健康になり説教を受けた事柄について理解した後、キリスト教に改宗しました。病に罹っていた者だけでなく、その両親や妻子もまた(キリスト教に改宗しました)。尊師には、人びとを治療するこれらの二つの家屋の事業は、これらの日本人にとって絶え間ない説教であることを、信じていただきたいです。主が私に活力を与えることをお考えになって、もし一人か二人のイルマンが、この始められた事業が維持されるように、治療の技術と言語を学ぶのであれば、私にとって大いに慰めとなります。すでに修院にある年若い召使い達は[すでに(○ポルトガル国立図書館所蔵の古写本により補う)]いくつかのことを理解しておりますが、彼等が年若い召使いであるが故に、日本人達は彼等を重視しません。実に、この事業には、ベルシオール・ディアス(○メルシオール・ディアス。リスボンに生まれ、1551年にインドへ向けて出発。日本へ赴いた後、1557年にインドへ戻ったメルシオール・ヌーネス・バレトに同行した。エヴォラ版には、その名前は記されない)のようなイルマンが必要でしょう。私が確信しているように、この事業を始めるように思し召した主は、それを前進させる者をお与えになるでしょう。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:351ページ 書翰127)

### ■15. 豊後の病院

1561年10月8日(永禄四年八月二十九日)付、豊後発 フアン・エルナンデスのインディアにあるアントニオ・デ・カドロス宛書翰

我々は当地豊後にひとつの病院を建てました。それは我々の(地所)に隣接する地所にあって、我々のそれと同様、毎晩鍵をかけて閉ざしております。この地所には二棟の病院の家屋があります。一棟では横痃患者が、もう一棟ではその他の病の者達が治療されます。これらの建物の周りには、12人の既婚者(の家)と、寡婦達の小屋が一軒あります。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:12ページ 書翰150)

### ■16. 病院本館が完成(府内病院について)

1561年10月8日(永禄四年八月二十九日)付、豊後発 フアン・エルナンデスのインディアにあるアントニオ・デ・カドロス宛書翰

聖イザベル訪問の日(○1561年7月2日、永禄四年五月二十日)病院の本館が整えられました。そこはとても清潔で、当地には

大量にある多くの絹の布や中国の紙を携えてキリスト教徒達が絶えず祈りに行く常設の礼拝所が中にあり、花束で覆われています。午前中、パードレ(○トルレス)がミサを挙げ、いとも親愛なるドゥアルテ・ダ・シルヴァは彼等に説教をしましたが、それは二つに分かれており、一方では福音書上の聖母の訪問を扱い、もう一方ではいかに慈悲が必要か、そして童貞(マリア)が行なったこの訪問において、身体的かつ靈的に、我々の隣人に慈悲を与える例が、いかにして我々に示されたか(を扱いました)。

そのミサと説教を聴いた後、食事をしに来ることを欲したすべての人びとに、病院の賄いにより晚餐が供されました。その至聖なる息子(○キリスト)に交わること、デウスの聖なる山に到達するまで我々が疲弊しないためのお恵みを、我等に与え給うよう、いとも優しき(天の)后にして我らの女主なる方にお祈りください。アーメン。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:17ページ 書翰150)

### III. 「医術」に関する記述

#### ■17. 日本の外科医術は不十分との見解

1556年1月7日(弘治元年十一月二十六日)付、マラッカ初、ルイス・フロイスのゴアにあるイエズス会員宛書翰

もともと日本人は、肉体の科学では世界で最高の医術によって知られておりますが、外科医術(の科学)はまったく欠けておりまします。それゆえ、その地(○日本)のパードレ達はそれ(○外科医術)に関する何らかの知識を持つ者を強く望んでおりました。貧しい人びとは治療してくれる者、もしくは治療ができる人がいないので、非常に辛く苦しんでいたからです。そのため、イルマン・アントニオ・ディアスが、かの地でその事業に役立てようと、こちらから一冊の外科の医学書と共に、多くの処方集と薬品を持って行きました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:15ページ 書翰101)

#### ■18. アルメイダ外科医を務める

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

早速、多数の患者が訪れ、(病院は)彼等の治療に用いられ始め、当地で(イエズス会に)迎えられた一人のイルマン(○ルイス・デ・アルメイダ)が医師を務めています。彼は外科医ですが、すでに世俗において良き才能を有し、深く靈的であることを望んでおり、主に身を委ねるために世俗の物を多く棄てた人です。市中やその周囲1、2レグア、乃至4レグアの山々には他の病人が多数あり、私達は、一人の日本人で、彼等の間では徳高き学識者にして偉大な医者である男(○パウロ・キヨウゼン)を選定しましたが、彼は他にも主が授け給うた才能を持っており、それらの日本人達を支えるべき大きな腕となっています。彼は薬草や、その他の薬草から作った多数の薬を携えて内陸へ彼等の治療に赴いていました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:55ページ 書翰106)

#### ■19. アルメイダ医術を伝授す

1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

親愛なるルイス(○ルイス・デ・アルメイダ)は、外科医術における特別な才能を、我等の主より授かりました。彼は修院の数人を殆どその専門家のように育成し、そこにはイルマン・ドゥアルテ・ダ・シルヴァも含まれます。彼は二つの方法で人びとを治療することができます。すなわち、靈魂のためには説教をし、身体のためには粉薬、膏薬及び焼灼剤を用いるのです。この事業は、大変尊敬されています(○エヴォラ版には、「大変な教化をもたらしています」とある)。日本人達が(私達を悪く)言うには及ばず、それによ

## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

り物事が大変平和に進みます。なぜなら、彼等はここであらゆるものに対する治療を見出すからです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:266ページ 書翰122)

### ■20. パウロの後任ミゲル(治療方法)

1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

彼が亡くなつてからは、ミゲルと称する別の者がその代わりを務めましたが、彼もまた亡くなり、両者とも聖人のように生涯を終えました。そこでパードレ(○トルレス)は、彼等の薬の(調合をする)練習をしました。それらはシナに由来し、二人の中国人(が著した)これら二冊の書物は学ぶのに容易であり、様々なものに効きます。飲むとすぐ三日熱や四日熱に作用するものがいくつかあり、同様にその他あらゆる病気に効くものもあります。

ギリエルメ・ペレイラが、(その船員)全員が病気の状態で豊後へ来た時、当地においてそれらの処方を用いて治療され、全員が治癒しました。そして、彼等が(その薬を)いくらか携えてシナに行き、体調が良かったので、彼等に分け与えるよう、パードレに熱心に請い求めています。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:268ページ 書翰122)

### ■21. 治療方法

1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

治療には二つの方法があり、すなわち、外科と内科です。なぜなら、ミヤコから一人の日本人が山口にわざわざやって来て、パードレ(○コスメ・デ・トルレス)がパウロ(○キヨウゼン。もと多武峰僧。第106号文書で、その死が報じられている)という名のキリスト教徒にしたからです。この者は仏僧や偶像と共に生活し育てられましたが、修道生活が性にあって、当地豊後へとやって来ました。パードレ(○トルレス)に付き従って、苦行に大変熱心で、つねに己を節制しました。パードレ・メストレ・ペルシオールは彼の才能を見抜きました。この者はかつて医者で、病に罹っていた時、書物の中にあつたいくつかの薬(の調合)を著しました(○エヴォラ版には、「死に至る病に罹っていた時、彼が心得ていた数種の薬の調合や書物を著わしました」とある)。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:267ページ 書翰122)

### ■22. 外科治療はアルメイダの指示に従い欧州の方法で行なう

1559年11月1日(永禄二年十月二日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰

用いられている外科治療は、イルマン・ルイス(○ルイス・デ・アルメイダ)の指示に従って、私達の(○ヨーロッパの)方法で(行ないます)。かくしてキリスト教徒であれ異教徒であれ、すべての病はここで和らげられています。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:268ページ 書翰122)

### ■23. 治療の様子

1559年11月20日(永禄二年十月二十一日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのイエズス会員宛書翰

当地には多様な種類の病気に罹った患者が治療にやってきます。それらは、私達の地(○ヨーロッパ)では治癒し得ない者達ですが、我等の主デウスの恵みにより、彼等は健康を回復します。本年15年、20年来病に罹っている多数の者が到来し、30日ある

いは40日のうちに健康になりました。私は、そのような御業は薬によるものではなく、主によるものであると信じております。これらの魂が、その魅力を知るに至るために、そのようなことが起こるように差配されているのです。これらの患者のうち大半は異教徒であり、中には貴人や仏僧もいて、多くの者は、彼等の聞く説教を通じて、肉体の健康と共に魂のそれもまた得て、ついには多くの者がキリスト教徒となります。しかしながら、パードレ(○コスマトデ・トルレス)はそれ(○患者の改宗)に関して次の方法を採っています。すなわち、彼等が治療中には、何人もキリスト教徒には改宗しようとはしません。彼等が健康になった後、継続的に説教を聞きにやってきて、まず祈祷を習得した場合のみ(キリスト教徒に)改宗します。というのも、(中には)キリスト教徒になるとよりよい治療を受けられると思って、そうなることを望む者がいるからです。

我が兄弟よ、これらの患者を治療する私を助け、あなたの慈愛を実践するために、当地域においてあなたにお会いすることを如何に望んでいることでしょう。というのも、本年(来院する)人が大変増え、もはや土地の者数名が私を補助するために必要だったからです。治療にあたる者は6、7名おり、朝に始まり、非常に遅くに終業します。親愛なる兄弟よ、もしあなたが来ないのであれば、その慈愛により、この事業において私達を助け得るイルマンの誰かが私達のもとに派遣されるよう、働きかけてください。今はこれ以上書きません。なぜなら、もしこれらのことが記されるべきであるならば、一束の紙にも書くことができ、それでも十分ではないからです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:329ページ 書翰125)

## ■24. 日本人は外科医術を知らず

1559年11月(永禄二年十月二日～十一月二日)付、豊後発 ルイス・デ・アルメイダのメルシオール・ヌーネス・バレト宛書翰

しかし、彼等は治療の方法、とりわけ外科医術を知らず、これらの疾患を殆ど治癒不可能なものと考えており、私がこれまで見てきた中で、完治するに至った者は一人もいません。主の恩召により私達の薬が彼等に有効であるのは、驚くべきことです。15年、20年と病にかかっていた人が、30日乃至40日で健康になるのです。これらの多くの人の中には、50乃至60レグアのところから当病院まで治療にやってくる者もいるため、その噂はすでにミヤコにまで広まっています。あまりにも病人の数が増え、そして今後もそうであるので、病人のための寝室を備えた一軒の大きな家屋と、健康な人びとのための当家屋を整備する必要がありました。それは病院の喜捨によってなされ、総計130クルザードかかりました。貴人達や土地の重立った者達の(帰依する)仏僧達が治療に訪れます。この夏、これらの大病から60名を超える人達が快復しました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:360ページ 書翰127-A)

## ■25. アルメイダによる治療

1561年10月1日(永禄四年八月二十二日)付、日本発 ルイス・デ・アルメイダのゴアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰

当市博多において、主は、二種類の大流行した病気から回復した人びとの間で、とりわけ二人の男性に健康を与えることを思し召されました。そのうちの一人は当市の妻帯者で、極めてひどい頭痛から、何度も自らの手で死のうとしました。(しかし)主は、彼に13日ほどのうちに健康を与えるよう思し召されました。もう一人は青年で、ひどい癲病に全身を冒されていました。キリスト教徒達は自分達の有する献身と信仰心により、主のご加護で私(○ルイス・デ・アルメイダ)が彼に健康を与えることができるであろうと考えて、私の許へ彼を連れて来ました。しかし私は、診察してすぐに、彼にその病気に効く薬はないと告げました。そして、彼等(○運んで来たキリスト教徒達)が落胆しないよう、彼に大変簡単な薬を作るよう命じ、その日から三日後にまた来るよう、その時再診しよう、と彼に言いました。彼に健康をお与えになった主デウスに讃美。というのも三日目の終わりに、彼はそのような病気には一度も罹ったことがないかのように、すっかり清められた(姿)でやって来たからです。私は、あれらのキリスト教徒達の篤い信仰と、私のうちに少ししかなかった徳に、恥じ入りました。そのためキリスト教徒達には、あの薬があの病気を治したとは思わないように、主が彼を信じる者達への愛により、彼を治し給うたのであると、一言いました。彼はすぐにキリスト教徒にしてくれるよう求めたので、彼等が信仰に関する事柄を理解した後、頭痛が癒えたもう一人の既婚の男性と共に、彼を(キリスト教徒に)しました。

# 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

(史料編纂所2018『原譚文編之四』:164ページ 書翰147)

## ■26. 医者パウロ(医療行為の内容)

1561年10月8日(永禄四年八月二十九日)付、豊後発 フアン・エルナンデスのインディアにあるアントニオ・デ・カドロス宛書翰

パウロという(修院にいる)大人のうちの一人は医者で、我々や罹病しているキリスト教徒達だけでなく、それ(○薬)を求めてやって来る異教徒のために、薬の調合を担当しており、そのために何の報酬も取りません。例外として、元気になった者が、彼等が受け取った薬に対して感謝するために、某かの些少な物を携えて来る時、彼等に恥をかかさぬよう、それを受け取ります。この日本人は、医術をよく心得ているにもかかわらず大変若いので、パードレ(○トルレス)は彼に自身の選択によって何かを行なうことを認めせず、修院の外にいる老医師の助言に従ってそれらを行ないます。その者(○老医師)は、キリスト教徒であれ異教徒であれ、患者の脈を取り、彼の指示によって薬が患者に与えられます。

この方法で、治療は的確に行なわれ、我々は感謝されています。たとえいくつか(の治療)が的確ではなかったとしても、我々が罪を着せられることはありません。もっとも、今までのところ明らかな被害は見受けられておりません。それゆえ、日本人のキリスト教徒や異教徒達は、天竺(○ローマ・イエズス会文書館所蔵の古写本には「イエス」とある)のパードレ達のそれ(○薬)に勝る薬はないと言っております。我等の主イエス・キリストが、(当地で)行なわれるこれらすべての事柄のために、日毎に彼等を肉体的に癒すのと同様に、彼等を靈的にも癒すよう、お望みにならんことを。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:9ページ 書翰150)

## ■27. アルメイダ、ルイスに医術を教授す(治療の内容)

1561年10月8日(永禄四年八月二十九日)付、豊後発 フアン・エルナンデスのインディアにあるアントニオ・デ・カドロス宛書翰

イルマン・ルイス(○ルイス・デ・アルメイダ)が行なってきた治療は、薬剤の効力よりもイエス・キリストの御徳によって、効果をあらわしたように思われます。この者は、去るこの(○1561年の)六月に肉体を治療するのを止め、魂の癒し(○改宗事業への従事)を始めましたが、それにより、私は彼の代わりに(身体の)治療をすることになるでしょう。

彼(○アルメイダ)は当地で、ルイスという、(自分がイエズス会に入った時に連れていた、一人のジャワ人の青年に教授しました。この者は治療を(過去にも)行ないましたし、(現在も)行なっておりますが、それは外科の知識によるものでも、薬剤の効能によるものでもないように見受けられます。というのも、それらの多くの傷は、10年、15年、20年と癒えないままにあったからです。彼がある貴人を治した時、それによって日本人達は大変驚きました。この貴人はある晩、少量の弾薬を精製していたところ、その中で火が弾けて、彼は全身に火傷を負い、その皮膚はすっかり焼かれてしまいました。(その貴人は)当院からセレグア(の所)におりましたので、彼の母親は大急ぎで一人の召使いを寄越して、彼を治療する者を彼等の許に派遣するよう、我々に請いました。彼女は、(彼が)健康になった暁には、息子と共にキリスト教徒になるであろうと約束しました。イルマン・ルイス・ダルメイダが不在でしたので、パードレ(○トルレス)はその時に病院で治療にあたっていた日本人医師を彼の許に遣わしました。その者は彼を見ると、その健康状態に絶望し、すぐに(病院へ)戻りました。次いで(パードレは)別の外科医を遣わしましたが、その者が彼に施した多くの治療をもってしても、彼にはまったく効果がありませんでした。

その母親は救済策が殆ど無いのを見て取り、一通の書翰を同じ日本人に託して送り、もし何らかの手立てがあればその苦境を救ってくれるようにと、パードレに懇願しました。かくしてパードレはその青年ルイスを彼の許に遣わし、彼が行なった治療により、三日後にその患者は食事を摂って眠り、それから数日後には健康になり、四肢にはいかなる障害も残りませんでした。我等の主イエス・キリストが、より必要としている人びとを、その魂において癒し給わんことを。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:14ページ 書翰150)

## IV. 府内教会に関する記述

### ■28. 大友義鎮より家屋と土地を与えられる

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

この時、同国の王(○大友義鎮)は、彼の木造の家屋数軒を私達に与えました。それは、当地において非常に価値あるものでしたので、少なからぬ恩恵でした。加えて、彼は毎年50クルザードの収益のあがる土地も与えました。そこからあがる収益を私達のために徴収する役目の人人が、彼等からそれを渡されねばならないため、これらはまだ支払われておりません。私達の本分はすべての人を友とすることをありますから、私達がそれについて依頼したり言及したりする必要のある理由が自ずと生じる時まで、(収益については)触れずにおきます。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:44ページ 書翰106)

### ■29. 家屋を解体し教会を築す

1557年10月29日(○弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

家屋はすぐさま解体し、私達が購入した地所に組み立てて、それらの家屋から200人以上収容可能な一宇の教会を建築しました。同様に、その教会に私達が宿泊するための部屋を、別に数室設けました。この教会は、(15)56年の諸聖人の日(○11月1日、弘治二年九月二十九日)の頃に竣工し、バードレ・メストレ・メルシオールがそこで甚だ厳かに最初のミサを挙げ、また、最後に私達は大に涙を流しつつ、すべての祈りを捧げましたが、これは、各人が自ら有する愛と、主への奉仕がここ日本の砂漠においていや増さんことへの希望を、明白に示すものでした。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:44ページ 書翰106)

### ■30. 仏僧による流言(人を食べるという噂)

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

当地では、私達について数多くの偽証がなされており、ことに私達は人間を食べると言われています。実際にこの話はあまりにも用いられるので、日本中に広まっています。その捏造者は仏僧達で、彼等はこれに信憑性を与えるため、血染めの布を扉に投げつけるのです。当(1)557年に、彼等は数回それを行ないました。また、私達は人間の肉体に入り込んだ悪魔であり、私達が語ることは私達の中で話す悪魔の誘導によるものだから、私達を信じないようにとも言っています。これに関しては、この者達を信用してはならない、なぜならこの者達は悪魔だからである、と書き付けたものを私達の扉に掲げます。この地で、私達は彼等から、このような仕打ちをたびたび受けているのです。

時に私達が通りを歩いていますと、彼等はあたかも犬、犬とからかって呼ぶ人のように、主の御名を侮辱して私達のことをデウスと呼びます。そしてその後、何度も若者達による投石が続きました。彼等は私達を世界で最も無感覚な(○ここではinsensitiveと解釈した。エヴォラ版では「憎むべきabominavel」となっている)人間と見なしています。私にとっては良いことであり、これを自らの驕りを抑えるために利用しています。従って、彼等がこのように私達と話す時には、下賤な人びとは黒人(に対する)ように、私達をおまえ呼ばわりしながら卑しい言葉で話しますが、身分ある人達は私達を敬い尊重します。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:69ページ 書翰106)

### ■31. 豊後の修院は永く存続する見込み

## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスバル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

私達が今所有する主要な修院は、豊後にあります。同地において、(修院は)いくつかの理由により、永く存続するように思われます。第一の理由は、国王(○大友義鎮)がキリスト教徒でないにもかかわらず、私達の友人であることです。彼が私達に与える助言と庇護は私達への友情からのものであり、己の領内において福音の教えが説かれることを喜んでいます。第二の理由は、他の地方よりもいっそう多くのキリスト教徒がいることです。そして、さらなる理由は、領地を支配し治める人びとによって、私達がよりいっそう知られ、信用を博していることです。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:77ページ 書翰106)

### ■32. 大友義鎮より家屋と知行を供さる

1557年11月7日(弘治三年十月十七日)付、豊後発、コスメ・デ・トルレスのイエズス会員宛書翰

インド副王の使節(○メンデス・ピントを大使とする使節)が到着したこと、当地の国王はこの地にある最良の杉の材木を用いて作った数軒の家屋を供し、さらに毎年50ドゥカードのレンダ(○知行地)を与えてくれました。もっとも、国王の家臣であるこの件を取り扱っている者は、十分にこれを支払おうとはしません。なぜなら、私達は与えられるものは受け取りますが、与えられるべきものについて要求はしないからです。私達はまた、同国王の承認を得て、広くて良い土地を購入しました。それは、私達が(このたび)購入した土地の一部にあたる、かつて国王が私達に与えてくれた非常に良い土地を除けば、当地で最良のものです。

国王が私達に与えた家屋で、私達はさらなる住居と収容施設の付いた、ひとつの教会を造りました。そこに私達は宿泊しています。私達が購入した土地では、そこに教会を建設するため、キリスト教徒達が私達を助けてそれぞれの仕事をしています。そこで最初のミサが立てられたのは諸聖人の日(○1556年11月1日、弘治二年九月二十九日)のこと、すでにそこに逗留していた船からパードレ・メストレ・メルシオール(○バレト)がやって来て、ミサを立てました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:111ページ 書翰108)

## V. 西洋音楽発祥に関する記述

### ■33. 二つの合唱隊

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスバル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

聖週間、すなわち枝の主日(○1557年4月11日、弘治三年三月十二日)になり、(中略)

その週に私達は早速、悲しみをもって教会を飾り、聖体を収めることを決めました。聖遺物安置所と小聖堂を甚だ敬虔に飾りました。私達はすべての儀式を行なうことに決め、この諸儀式を聖水曜日に大きな十字架を立てることで始めました。商品のために同地(○豊後)で越冬した五名のポルトガル人が私達を手助けしてくれたことにより、二つの合唱隊を作りました。彼等はほぼ全景が第一週の修練に従い、総告解を行ないました。時間になると、私達は五名ずつ双方の合唱隊に加わり、絶えず跪いたまま哀悼の意を込めて、時祷書を歌いあげました。詩篇を終えた後に、ベネディクトゥス(○ザカリアの賛歌)を多声部合唱により歌いました。それが終わるとミゼレレ・メイ・デウスを唱えましたが、(それは)まさにその時教会にいたキリスト教徒達の、多大な涙と信心を伴うものでした。彼等は一様に深甚な感化を受け、主を讃えました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:60-61ページ 書翰106)

### ■34. (アイレス・サンチェスの府内教会での仕事 楽器の演奏を教える)

1562年10月11日（永禄五年九月十四日）付、豊後発 アイレス・サンチエスのヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰

最後には私を受け入れてくださり、現在、私は、病人を治療したり、全きまでに厳粛に聖なる勤めが果たされ、デウスが奉仕されたために、修院にいる15人の日本人やシナ人の少年達に、読み書き、唱歌、ヴィオラの奏法を教えたりしております。主にあって、この方法が日本人の改宗に大いに有益であらんことを、我々は期待しています。

（史料編纂所2022『原譚文編之五』:115ページ 書翰161）

### ■35. 大友義鎮を修院に迎え饗応する

1562年10月25日（永禄五年九月二十八日）付、日本発 ルイス・デ・アルメイダのイエズス会員宛書翰

国主が来る予定の時間になりました。私は事前に訪問して、自身と共に嫡子と一緒に連れてくるよう彼（○義鎮）に請うたところ、彼は快くそれに同意しました。その王国（○豊後国）の貴人達である、彼と共に来た全員に対し、我々は修院を相応しいように飾り立て [迎えました（○メディナ編『日本史料集1558-1562』により補う）]。食卓についた後、彼等のやり方と我々の（やり方両方）で馳走が給仕され、食事中には、ヴィオラ・ダルコ（○弓で弾く弦楽器。今日のヴィオラとは異なる）の演奏があつて、四度奏でられましたが、これはキリスト教徒の王侯の前でも何ら恥じることなく奏でられ得るものでした。それらを演奏していた少年達はキリスト教徒で、全員白衣を着ておりました。人びとはこれを聴いて非常に喜び、特に王子（○義鎮の子。嫡子長寿丸、後の義統か）は、食卓についていましたがすべて（の動作）を止め、彼もまたそれ（○少年）だったために、少年達の許へ行きました。というのも、彼は五歳以上ではありませんが（○長寿丸は数え年で当時五歳）、彼の知恵は15歳のそれだからです。彼等は歓待された後、席を立ち（ましたが）、我々を尊んで、遅くまでおりました。夕刻、国主は招待にかかる勞苦について我々をねぎらい、辞去しました。翌日、修院への来訪で我々に施した誉れに感謝するため、私は彼（○義鎮）を訪ね、それからパードレ（○トルレス）の許へ戻る許可を請いました。彼は、パードレのない教会（○建物）だけになっているので、すぐの帰還を彼に伝えるよう、私に頼みました。かくして、豊後ではすでにすることはありませんでしたので、私は翌日出発するつもりで彼に暇乞いました。

（史料編纂所2022『原譚文編之五』:179ページ 書翰162）

## VI. 西洋演劇発祥に関する記述

### ■36. 降誕祭（西洋演劇発祥の地に関する記述）

1561年10月1日（永禄四年八月二十二日）付、日本発 ルイス・デ・アルメイダのゴアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰

降誕祭もまた、大きな喜びと共に当地で挙行されます。そこでは、日本人キリスト教徒達は全員が、何日も前から準備した出し物を携えてやって来ます。そこ（○出し物）で彼等は、多くの聖書や教理に関する話を表現します。（出し物は）それらの（聖書や教理等の）話に加えて、彼等のやり方（○日本風）で、絶え間なく歌われる民謡や謡曲で構成されています。

（史料編纂所2018『原譚文編之四』:158ページ 書翰147）

### ■37. 降誕祭（西洋演劇発祥に関する記述）

1561年10月8日（永禄四年八月二十九日）付、豊後発 フアン・フェルナンデスのインディアにあるアントニオ・デ・クアドロス宛書翰

去る降誕祭（○1560年12月25日、永禄三年十二月九日）のおよそ20日前、パードレ（○トルレス）は二、三人のキリスト教徒達

に、降誕祭の夜、主において皆が楽しめるよう、何らかの戯曲をしてくれたら喜ばしいと言いました。彼等には何を為すべきか見当がつかなかったのですが、(パードレは)彼等の裁量に任せました。降誕祭の夜が来た時、この者達は、デウスを讃美するために、聖書の中から彼等がすでに聞いたことのある事柄に合わせて、多くの創作を用意して登場しました。

最初(の劇)はアダムの転落と贖罪の希望(でした)。そのために、教会の中央に数個の金色の果実をつけた林檎の樹を置き、その樹の下でルシファーがイブを欺きました。これは日本語の彼等の謡曲を伴っており、めでたい日であったにもかかわらず、大人も子供も泣かぬ者はおりませんでした。

転落の後、彼等は大天使によって楽園の外へ追放されました。それはさらに多くの涙と嗚咽を誘うものでした。というのも、彼等が選んだ題材がその(○涙と嗚咽の)原因となりましたし、登場人物が魅力的であったため、泣かぬ者はいなかったのです。寸を置かずアダムとイブが、デウスが彼等にお与えになった衣服を纏って(楽園を)出て行くと(○「創世記」3章21節)、すぐに天使が現れ、最後には救済されるであろうという希望によって、彼等を慰めました。彼等は歓喜と少なからぬ安らぎの涙をもって歌いながら退場し、観客を喜ばせました。

この後、彼等はソロモンに裁きを請うたかの二人の女性(○「列王記」上、3章15~28節)を演じました。この劇は、母が子供に抱く生来の愛の力を彼等に見せるという点において、この地にある自らの子供達を殺す女達の蒙昧にとって良きものでした。こうして、その他多くの聖書の中の出来事(が演じられました)。羊飼い達が登場した後、彼等の許に大天使が現れ、喜びの知らせを報じ、イエス・キリストを崇めに行くべきことを教えました(○「ルカによる福音書」2章8~12節)。そこではイエス・キリストが、善人と悪人を裁くために、果てない栄光を湛えて(この世に)降臨せねばならない理由が示されました(○「マタイによる福音書」25章31~46節)。それは、一人がすべて詠唱し、キリスト教徒達がもう一方を応唱して、彼が同じ歌を唱えるのを助けました。

これらのことはすべてデウスのご助力と恩寵によって、いとも完璧に(○ポルトガル国立図書館所蔵の古写本には「完全かつ完璧に」とある)行なわれましたので、いとも親愛なる兄弟達よ、それを見るためにこちらにいる方が、そちらでそれを耳にするよりも、遙かに大きな喜びとなるでしょう。

真夜中になると、常に習慣としているあの信仰心を湛えて、あらゆる者がミサに与りました。また、聖体を捧領するために告解する者が多くおりましたが、その時にはそれを捧領しませんでした。パードレ(○トルレス)はその者達に、その夜の祭典のため、何人かは(聖体捧領に)必要な平静を欠いた心持ちかもしれない(ので)、至聖なるイエスの名の祝日(○1月2日)まで待つようにと言い、その日には、我々皆が誓願を新たにし、大勢のキリスト教徒が聖体を捧領しました。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:24ページ 書翰150)

## ■38. 復活祭の日の演劇 西洋演劇発祥に関する記述

1562年10月11日(永禄五年九月十四日)付、豊後発 アイレス・サンチェスのヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰

復活祭の日(1561年4月6日)には、復活の行列で聖書の一部、すなわちイスラエルの子等のエジプトからの脱出(○「出エジプト記」14章)が上演されました。このために、我等の教会の前に紅海を造作する工事は欠かせませんでした。それはイスラエル人が通る際に開き、ファラオが軍を率いて通る時には再び過ぎ行きました(○ポルトガル国立図書館所蔵の古写本には「再び閉じました」とある)。また、クジラから出てきた預言者ヨナの物語(○「列王記」14章25節、「ヨナ書」)や、これらに類することが上演されました。行列の終わりには、過ぎ去った受難の哀しみを復活の大きな歓びと対比して、民衆に演劇の形式で訓戒を行ないました。とりわけこれによって、キリスト教徒達は大いに満足し、言葉に表すことができないほど、(彼等は)主の内にあって慰めを得ました。

当年、例えは降誕祭の日のように、他の祝祭においても、いくつかの演劇が行なわれました。キリストの生誕の前に、ノアの時代(○「創世記」6~9章)の世界の洪水と彼の箱舟への乗船が演じられました。この後はロトの捕囚(○同14章1~24節)、アブラハムの勝利(○同22章1~18節)が(演じられ)、これらのことすべてにおいて、殆ど作り物とは思えないような詳細さや物事の扱われようでしたので、デウスを讃美するためのある種の強い理由となりました。そこで最後に披露されたのは、馬小屋への羊飼い達の来訪と羊飼いに対する聖母マリアの行ないでした。

これらのことすべてにおいて、聴衆同様に演じる者達の間でも、感動、涙、そして号泣が共有されました。これがすべて終わると、

大変信心深くミサに与り、聖体は誰も捧領しませんでした。というのも、パードレがそれを割礼の日に取っておくことを望まれたからで、(実際に) そうしました。そして我々は彼等と一緒に、それらの日には習慣としてあるように、イルマン達は各々の誓願を刷新しました。いとも親愛なる方々よ、これが当豊後の市でイルマン達やキリスト教徒達の間で生じていることです。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:120ページ 書翰161)

## VII. 牛めし(牛丼)発祥に関する記述

### ■39. 牝牛一頭と米を煮込み信徒に振る舞う

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

特別な日で大きな祝祭の日でしたので、すべてのキリスト教徒を招きましたが、それはおよそ400名余りでした。というのも、他の多数のキリスト教徒は立ち去り、また別の多数も、山間部の人びとであるために、来なかったからです。他の人達も来たのですが、知らずに帰りました。この祝宴のために私達は牝牛一頭を予め買っていました。祝宴ではその肉と一緒に煮た米を彼等に出し、皆、大いに喜んで食べました。その後、貧者が多数訪れ、残り物(を食べました)。彼等は、内にも外にも、主への讃美を表しました。かくも遠隔の地であろうと、主の御名が祝福され、称賛され、讃美されんことを。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:66ページ 書翰106)

## VIII. その他に関する記述

### ■40. 義鎮より博多に土地を与えられる(義鎮が修院をたずねる)

1557年10月29日(弘治三年十月八日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰

ある夜、彼は晚餐のため私達の修院を訪れ、私達からも、また冬を越すポルトガル人からも、大いに祝われました。彼は修院と教会を悉く見てたいそう喜び、多くのことを質問して、その(返答に)よく耳を傾けました。最後に私達に対して、多数の裕福な商人を擁する大きな市である博多に、修院を建てるための土地を与えると言いました。

(史料編纂所2014『譚文編之三』:78ページ 書翰106)

### ■41. カピタン・モール、義鎮の招宴を習わしとす(宗麟南蛮船に乗る)

1562年12月10日(永禄五年十一月十四日)付、ゴア発 パードレ・バルタザール・ガーゴのイエズス会員宛書翰

フィダルゴであるカピタン・モールのような人が来る時、というのも彼等は交易に従事しているからですが、彼等が彼(○義鎮)の港へ赴く際、彼をナウ船に招待して宴を催す習わしです。商人達は彼の傍におり、彼は彼等と共に笑ったり楽しんだりし、食べ物を与えたりします。しかしながらカピタン・モールに対しては、彼に風が当たらぬように、帽子を脱いで外側に立っています。これ(○ポルトガル人との親交)は長時間に及びます。

(史料編纂所2022『原譚文編之五』:217ページ 書翰164)

## アルメイダ年表

## Timeline of Almeida's Life

### 【凡例】

- ・本年表は、ルイス・デ・アルメイダの生涯と事績を概観できるよう作成したものである。イエズス会宣教師たちの書翰、およびルイス・フロイス『日本史』からアルメイダが登場する記事を抽出・整理する方針をとった。
- ・史料の参照にあたっては、東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』(現在、1～6巻(1547～1563年の書翰を収める)まで刊行済、東京大学出版会)、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(全15巻、同朋舎)、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』(全12巻、中央公論社)、柳谷武夫訳『日本史』(全5巻、平凡社)を利用した。なお、1572年については、岡美穂子(1572年10月5日付、天草発、ルイス・デ・アルメイダの書翰)([東京大学史料編纂所研究紀要]第33号、2023年)を参照した。
- ・原則として、書翰および『日本史』で確認できる内容を「事項」に採用し、推定に基づく内容や補足は注として末尾に付した。
- ・年表中の表記や表現については、東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』の表記を優先的に採用し、ついで松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』をはじめとする、そのほかの訳注本の記述を尊重した。
- ・史料上で月日や時節が明確に記録されている場合は「月日・時節」欄に明記し、不明確な場合は空欄にしているが、「事項」における内容は基本的には時系列に沿うものである。
- ・アルメイダの生年を1525年とし、各年における彼の年齢を示す欄を設けているが、生年はあくまでも推定である。1555年9月16日付アルメイダの書翰において、1555年時点で30歳という年齢に達している旨を記しており、当年に30歳であれば生年は1525年となる。しかし、「(30歳の)年齢に達している」という書き方からして、数年程度の誤差がある可能性はある。

…府内での出来事 …大友宗麟(義麟)に関すること

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
大永5年頃	1525年頃		リスボンで生まれる。		
天文15年	1546年	3月30日	ポルトガル国王ジョアン3世より医学の学位を授与される。※1	21	
天文21年	1552年		コスメ・デ・トルレス司祭を訪ねるため、平戸から山口に赴く。※2 イエズス会に寄附をする。	27	
弘治元年 /天文24年	1555年※3		ドゥアルテ・ダ・ガマの船で平戸に来航。 バルテザール・ガーゴ司祭に会うため豊後に訪れる。幼児救済のため1000クルザドを寄附。これとは別に、100クルザドをポルトガルにいる司祭たちに送付。大友義麟(宗麟)に育児院の設立を進言するとともに、養育費を出すことを引き受ける。	30	A
	9月		ガーゴとともに、豊後に平戸に移動。		
	9月16日		平戸からマカオのメルシオール・ヌーネス・バレト司祭に書翰を出す。バレト来日のための船購入費として、2000クルザドを送付。人を介して、医薬品と軟膏を日本に送るように依頼。		
弘治2年	1556年		イエズス会に入会し、5000クルザドを寄附。	31	
	12月25日～4月半ば		トルレスが大友義麟(宗麟)の許可を得て、教会に隣接した地所に病院を建設。※4 家屋1軒のうち、1室は軽い傷と病のために、もう1室はハンセン病患者に充てる。この病院で医師を務め、日本人医者パウロ・キヨウゼンとともに、治療に従事。		B
弘治3年	1557年	11月1日	豊後にバレトに書翰を出す。大友義麟(宗麟)から賜ったイエズス会への提供物(修院を建てるための博多の土地、豊後にかかる館の跡地、移動する際に用いる馬)と、父の訃報を記す。	32	C
弘治4年 /永禄元年	1558年		豊後に滞在。薬局に必要なものを中国から取り寄せる。	33	D
	2月23日～4月9日		四旬節に朽網に滞在。20年間病気だった男性の治療を行う。		
永禄2年	1559年	夏	府内の病院で200人以上の外科および内科の治療にあたる。修院で外科医術にかかる専門家の育成に取り組み、このなかにはドゥアルテ・ダ・シルヴァ修道士も含まれる。靈魂の治療には説教を行い、身体の治療には粉薬・膏薬・焼灼剤を用いる。ギリュルメ・ペレイラ修道士のナウ船が豊後に到着した際、乗組員が病気に罹っていたため、彼らに治療を施す。	34	E
	11月		豊後からバレトに書翰を出す。日本人は外科医術を知らないこと、彼らに投与した薬が効果的であったことを記す。人びとが遠方から治療に訪れ、病院の噂が都にまで広まっていると述べる。修院の日本人やインド人の召使いの助けを借りながら、当年の夏には60人以上を回復させる。山口と博多における修院の造営費、土地の領主たちへの贈り物、およびミサ用の葡萄酒と病人に用いるポルトガル産のオリーブ油が不足している旨を記す。		F
	11月20日		豊後からイエズス会員に書翰を出す。130クルザドの寄附金を費やして、1軒の家屋を増設し、府内の病院を発展させたことを記す。多くの人びとが病院での治療を契機に改宗するため、病院を補佐する修道士の派遣を依頼。※5		G
永禄3年	1560年		メルシオール・ディアスの書翰において、日本に滞在している宣教師として名前が載る。	35	
永禄4年	1561年	6月初め	博多・度島・生月島への訪問をトルレスより命じられる。	36	
	6月7日		豊後に発ち、博多に向かう。道中、数名の少年に洗札を授ける。		
			博多で説教を行う。18日間滞在し、当地にいた山口の國主に仕える仏僧2人を含む70人※6をキリスト教徒にする。頭痛を抱える男性とハンセン病患者に治療を施し、回復・改宗させる。		
	6月末		博多を発ち、度島へ向かう。		
	7～8月		度島にて。8人をキリスト教徒にする。 生月島を訪れる。キリスト教徒たちに新たに教会を作ることを指示。 獅子に移動。礼拝堂を設置する工事に着手。 飯良に移動。キリスト教徒たちに教会を作ることを指示。 海路で飯良から春日に移動。キリスト教徒たちに1軒の修院を建設するように指示。 生月島に向かう。平戸において松浦隆信に謁見すべきか否か、ドン・アントニオ(籠手田安経)に判断を仰ぐ。謁見すべきではないとの言付けを受けた後、平戸に向けて出発する。		
			平戸に到着後、ナウ船の船長であるフェルナン・デ・ソウザを訪ね、アントニオに会う。インドから届いた祭壇画を船に掲げ、キリスト教徒たちが見学できるように計らう。アントニオとその弟であるドン・ジョン(一部勘解由)が祭壇画を見学する。 当地におよそ20日間滞在し、50人ほどをキリスト教徒にする。教会建設の許可を得ようと松浦隆信に依頼するが、許可が得られず密かに教会を設ける。		
			生月島に移動。12～13人をキリスト教徒にする。新しく作られた教会に赴き、講和を行う。到着の翌日には、当地を発つ。 度島に到着。その日のうちに平戸に向けて出発する。		
			平戸に到る。アントニオの息子たち(籠手田栄ら)のために、アントニオ邸に礼拝室を設置。		
	8月22日		海路と陸路で博多に向けて移動。		
	8月23日		海路を進み、海賊とみられる船に遭遇。体調が悪化。		
	8月24日		ある大きな集落で休息し、博多に到着。博多にてキリスト教徒たちから薬と食料を受け取る。		
	8月25日		豊後にに向けて出発。		
	8月末		豊後に到る。 到着後、1か月間病に伏せる。		H

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
永禄4年	1561年	10月1日	豊後からゴアのアントニオ・デ・カドロスに書翰を出す。 10月初め、体調が回復。府内周辺に教会を5つ整備するようトルレスより命じられる。	36	I
		11月	島津貴久からマノエル・デ・メンドーサを通じてポルトガル人派遣の要請があり、トルレスより鹿児島訪問の命を受ける。		J
		12月	豊後を発ち、朽網付近の教会で1泊。翌朝出発し、3日かけて某港に到る。逆風により某地に寄港し、1日半過ごす。 阿久根に向かう。阿久根の国主を訪問する。海路にて鹿児島に向かう。		
永禄4年 /永禄5年	1562年	1月~	道中、市来城に立ち寄る。城主・新納康久を訪問。13年前に当地を訪れた、フランシスコ・ザビエルの指示を遵守していたミゲルに会う。新たに9人をキリスト教徒にする。 鹿児島に到着。島津貴久を訪問し、トルレスの書翰を渡す。貴久よりインド副王宛および副管区長宛の書翰を預かる。 坊津に向かう途上、貴久の祖父を訪問。 坊津に到着し、そこに滞在していた病人たちに治療を施す。15日滞在し、9人をキリスト教徒にする。 鹿児島に到る。薩摩福昌寺住持である忍室文勝と親交を深める。忍室文勝の両目の具合が良くなかったので、目薬を携えて訪問。福昌寺の末寺である南林寺住持に面会。貴久の家臣をはじめとする35人をキリスト教徒にし、彼らの信仰の場所として家屋1軒を建てる。 鹿児島に4ヶ月ほど滞在した後、市来城を訪れる。城主の息子に対して、玄義に関する書物を当地のキリスト教徒に読み聞かせる役目を与える。約10日間滞在し、新たに70人ほどをキリスト教徒にする。 鹿児島に戻る。トルレスから書翰が届き、豊後に戻るよう指示を受ける。 市来城に立ち寄り、数日過ごす。当地のキリスト教徒のために、信仰を維持するための規則を残す。17日かけて豊後に赴く。 豊後に到着して約1ヶ月後、日本人青年ダミアンとともに平戸と横瀬浦に行くようトルレスより命じられる。	37	K
		7月5日	ファン・フェルナンデス修道士とダミアンとともに、豊後に出発。		
			出発して5日目、博多から4レグア離れた場所に宿泊。 翌日、博多に到着。		
		7月12日	ダミアンを平戸に残し、日本人のペルシオールとともに、横瀬浦に向かう。 3日後、横瀬浦に到着。当地にはカピタン・モール・ペドロ・パレットのナウ船が来港しており、イエズス会の書翰を受け取る。 到着の翌日、トルレスの代わりに大村純忠と彼の執政官である朝長純利を訪問。朝長純利と横瀬浦の開港や知行給付などに関する交渉を行う。大村側の申し出を保留する。		
		8月	トルレスが横瀬浦に来て、大村側の申し出を受諾する。 横瀬浦に関する協定を書面にて取り結ぶため、トルレスの指示により大村に向かう。 大村にて。大村純忠に会い協定を結ぶ。 協定を交わして5日後、横瀬浦に到る。トルレスの指示を受け、ペルシオールとダミアンを連れて横瀬浦を発ち、博多経由で豊後に向かう。		
		9月	豊後に到着して7日後、修院で大友宗麟(義鎮)と晚餐をともにする。豊後を発ち博多に向かう。博多でフェルナンデスと合流。		
		9月22日	横瀬浦に到着。		
		10月25日	イエズス会員に書翰を出し、日本人を派遣するよう請う。 ドン・アントニオ(籠手田安経)と松浦隆信より、トルレスの平戸派遣を要請される。		
		10月29日	トルレスに先んじて平戸に向かう。 平戸にて。キリスト教徒が亡くなり、盛大な葬儀を行う。 ドン・ジョアン(一部勘解由)の館で松浦隆信と晚餐をともにする。 トルレスの平戸訪問に向けて、祭壇を準備するため平戸の島々に行く。フェルナンデスを平戸の教会に残し、ドン・アントニオ(籠手田安経)の家臣とともに横瀬浦に戻る。		
		12月2日	横瀬浦に着く。豊後を目指して平戸から博多に出発するトルレスを見送る。		
		12月25日	横瀬浦にて。降誕祭をとり行う。		
			教会を有する場所を壁で囲み、階段を作り、近くの泉から水を引く。菜園をはじめ修院に必要な設備を整える。		
永禄6年	1563年	2月20日	横瀬浦に戻ったトルレスと会う。	38	L
			有馬義貞の家臣である島原純茂より修道士派遣の要請があつたため、トルレスの命を受け、四旬節の半ば、ペルシオールと日本人通訳とともに、島原に向けて出発する。		
			トルレスの指示で義貞の従兄弟のもとに立ち寄り、5日かけて島原に到着。		
			島原にて。純茂と晚餐をともにする。その妻や家臣たちに説教を行う。50人ほどをキリスト教徒にする。戦のために純茂のもとに滞在していた義貞に面会。仏教装束を着て布教を行う。		
		4月4日	枝の主日、島原純茂の娘をキリスト教徒にし、洗礼名マリアを授ける。		
			聖週の月曜日、純茂より教会を建設するための地所を与えられ、トルレス宛の書翰を託される。横瀬浦で復活祭を過ごすため、島原を出発する。		
			水曜日、横瀬浦に到着。大村での家臣間の対立の報を受け、トルレスより大村への派遣を命じられる。		
		4月15日	復活祭の第2週、横瀬浦を発ち、大村に到着。家臣間の対立に関与し、領内の鎮静化を図る。大村純忠の居所で説教を行う。		
			大村にて。5、6日滞在した後、日本人3人を伴い、有馬義貞を訪ねる。義貞とキリスト教に関する問答を行う。義貞より領国内に布教の許可が出され、説教を聞くようにという指示が載る口之津宛の書翰を託される。		
			島原に到着。当地に数日間滞在し、およそ70人をキリスト教徒にする。		
			有馬の港に向かう。島原純茂と乗船し、有馬義貞の舅・安富徳円入道の領地である深江に立ち寄り、深江城で徳円とその妻子たちに説教を行う。		
			海路で口之津に到る。15日にわたり洗礼を授け、当地の領主とその妻子をはじめ約250人をキリスト教徒にする。島原に向けて出発する。		
			島原にて。当地的仏僧がキリスト教徒や領主を妨害していたため、異教徒らに聴聞することを命じるよう純茂に依頼する。200人ほどをキリスト教徒にする。海路にて口之津に向かう。		
		6月7日	口之津に向かう。教会の敷地付近に設置した十字架の側でキリスト教徒のこどもたちを埋葬する。		
		6月25日	トルレスから書翰が送られ、横瀬浦に来るよう指示を受ける。		
		6月26日	口之津に向かう。教会の敷地付近に設置した十字架の側でキリスト教徒のこどもたちを埋葬する。		
		7月2日	島原に到着。中国からのナウ船が横瀬浦に入港したことを聞き、海路で横瀬浦に向かう。		
		7月5日	横瀬浦に到着。		
		7月6日	ドン・ペドゥロ・ダ・ゲラの船で横瀬浦に入港したルイス・フロイス司祭に会う。		

## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
永禄6年	1563年	7月9日	ドン・パルトロメウ(大村純忠)を訪問。純忠がIHSの文字と十字架が記されている衣服を身に着け、首には十字架を懸けロザリオも携えている姿を見る。純忠と午餐をともにする。都の学者たちとガスパル・ヴィレラ司祭との問答を記した一書の内容説明を求められる。有馬義貞へ改宗を勧める純忠の伝言を預かる。	38	M N O P Q R
		7月15日	横瀬浦に到着。		
		7月17日	トルレスの命により、豊後に向けて出発。		
			豊後までの途上、有馬義貞を訪問。島原に行き、新たにおよそ20人をキリスト教徒にする。口之津に立ち寄り、再び島原に移動した後、ただちに豊後に向けて出発する。		
		7月25日	豊後に到着。		
		7月27日	臼杵に行き、大友宗麟(義鎮)に面会。		
			豊後に戻る。 ただちに、トルレスの指示により臼杵に行く。有馬義貞と龍造寺隆信宛の書翰を執筆することを大友宗麟(義鎮)に依頼する。再び豊後に戻る。都の特使を修院に招くことを宗麟より打診される。		
		8月25日	豊後にて。横瀬浦の焼き討ちの報を受ける。		
			横瀬浦のキリスト教徒たちを助けるため、豊後を出発し、陸路で高瀬に到る。3日間滞在。 高瀬を発ち、島原に向けて出発する。 島原に到着。同船していた豊後からの人びとより忠告を受け、下船せず。状況確認のため日本人を派遣し、船で宿泊する。 翌朝、島原を発ち、口之津に到る。有馬義貞とドン・パルトロメウ(大村純忠)の父である仙巖(有馬晴純)によるキリスト教徒迫害の影響が及んでいるため、ここでも下船せず、2日ほど過ごす。 口之津から17里離れた、仙巖の領地に向かう。仙巖の家臣と武装した人々より尋問にあい、退去を命じられる。		
		9月20日	2日かけて横瀬浦に到着。有馬義貞とその従兄弟である西郷純堯が和睦を結ぶという報に接する。		
永禄7年	1564年	11月17日 ※7	横瀬浦からインドの修道士に書翰を出す。	39	S T U
			島原のドン・ジアンに訪問を請われ、トルレスとジャコベ・ゴンサルヴェス修道士とともに、横瀬浦から当地に向かう。 島原に到着後、ドン・ジアンの家に8日間滞在。 高瀬に到着するもすぐに、豊後に向かう。トルレスは病のため高瀬に留まる。 豊後に到着。大友宗麟(義鎮)のいる臼杵に赴く。宗麟より書翰を預かり、豊後に戻る。		
		12月25日	豊後で降誕祭を盛大にとり行う。この頃、仙巖(有馬晴純)が仏僧を使節にたてて大友宗麟(義鎮)のもとに遣わせる。仏僧が交渉のための資金不足に陥っていたところ、彼に金の延棒を届ける。		
			豊後で四旬節と復活祭を迎える。 復活祭が終わって数日後、川尻にいるシルヴァの治療をトルレスより命じられる。 豊後を発ち、5日かけて川尻に到着。痩せ細ったシルヴァに面会する。シルヴァがトルレスに会うことを希望したため、彼を連れて高瀬に向かう。 高瀬に到着しておよそ10日後、シルヴァの死を看取る。トルレスの代理で有馬義貞のいる島原に向かう。 島原に到り、新たに6人をキリスト教徒にする。仙巖(有馬晴純)のいる有馬に向かう。 有馬に到着するとすぐに、仙巖に謁見する。仙巖より口之津の地所と家を与えられる。		
		10月14日	インドのイエズス会修道士らに書翰を出す。		
			口之津を発ち、島原と高瀬の間は海路で進み、高瀬から平戸までを陸路で移動する。平戸に到着するまで1ヶ月を要す。博多から11里にあるキリスト教徒の町に赴き、こども6人に洗礼を授ける。 姪浜に行き、船を待ちながら約8日間滞在。		
		10月20日	姪浜を出発し、名護屋に到着。平戸に向けて出発。		
			平戸に1日滞在し、バルタザール・ダ・コスタ司祭に会う。翌日、度島に赴く。さらに翌日、ドン・アントニオ(籠手田安経)の城に訪問する。同日には平戸に戻り、18日間滞在。		
		11月~	ルイス・フロイス司祭とともに、平戸を発ち、口之津に到着。トルレスとジャコベと面会し、4日間滞在。 島原に着く。島原純茂を訪問。 島原を発ち、高瀬に向かう。翌朝には出発し、朽網で1泊した後、翌日には豊後に到着。 到着から7日後、フロイスとともに臼杵に赴き、都に向かう次第を大友宗麟(義鎮)に伝える。宗麟より都の領主数人に宛てた紹介状を与えられる。 豊後に戻る。風待ちのため、府内と港の間を3回往復しつつ、1ヶ月間留まる。		
		12月26日	豊後で乗船し、都に向けて出発。		
永禄7年 /永禄8年	1565年		3日かけて、伊予の堀江に到着。豊後に向かう途中であった、公家のマノエル賀茂在昌が訪ねてくる。出産直後の女性に薬を与える。	40	V W X Y Z
		1月	8日間滞在し、6人をキリスト教徒にする。 6日かけて、塩飽に着く。 塩飽までの船が得られず、14里離れた坂越に移動する。およそ12日間滞在した後、坂に行く船に乗る。		
		1月27日	坂に到着し、日比屋了珪の家で歓待を受ける。		
			病のため25日間ほど坂越に留まる。都に向かうフロイスとは別れる。キリスト教徒の医師から薬による治療を受ける。8人をキリスト教徒にする。滞在中、日比屋了珪の娘であるモニカの婚約話に入り、了珪に婚約を解消することを説く。ヴィレラの命により篠原長房を訪ね、家臣3人をキリスト教徒にする。出発に際し、日比屋了珪から茶会の接遇を受ける。 飯盛に向かうため、ある川でサンチョヨニ箇(三箇頬照)が準備した船に乗る。飯盛の麓で下船し、駕籠に乗り、山頂に到る。 翌朝、ヴィレラとともに、三好長慶を訪ねる(この時、三好長慶の死は伏せられており、実際に面会したのは三好重存(後の三好義継))。城下の教会に行き、8人をキリスト教徒にする。自身の治療のため、サンチョヨニ箇が用意した駕籠に乗り、都に向かう。 都に到着後、約2か月間、療養する。都に滞在中、フロイスとともに、公方様の宮殿・職人商人の町・市街の中央にある阿弥陀の寺院・森にある五十の僧院を見学する。※8		
		4月29日	奈良に向けて出発し、その日の夜に到着する。		
		4月30日	キリスト教徒2人を訪問するため、多聞城に向かう。		
		5月1日	興福寺・春日大社・手向山八幡宮・東大寺を訪問する。		
			奈良を出発し、十市に到り、十市城を訪ねる。3日間滞在。 十市を出発し、沢城に赴き、城内の教会に宿泊する。高山図書に会う。9人をキリスト教徒にする。 乗船して坂越に向かう。日比屋了珪の家に宿泊しながら、3日のあいだ船の出帆を待つ。		

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
永禄8年	1565年	5月15日	堺を出発する。堺の医師である養方パウロを豊後に連れていく。	40	V W
			13日かけて豊後に到着する。 到着から4日後、 <b>大友宗麟(義鎮)</b> を訪ねるため、臼杵に向かう。教会を建設する場所を宗麟に請い、居城近くの地所をもらい受ける。 豊後に戻り、2・3日滞在した後、有馬に向かって出発する。 陸路と海路で8日かけて、島原に到着。トルレスに面会。口之津に向かう。 口之津に到着。中国を出発したドン・ジョン・ペレイラのナウ船が福田に到着したとの報を受け、福田に移動する。 福田に到着して15日後、豊後から来たペルシヨール・デ・フィゲイレド司祭と一緒にいた際に、トルレスよりドン・バルトロメウ(大村純忠)の娘を治療するため大村に向かうよう指示を受ける。 大村に着く。バルトロメウの娘が病の危機的な状態を脱した後、福田に赴く。 福田に到着。トルレスからの書翰を受け取り、豊後に戻るよう指示を受ける。 口之津に到る。トルレスの体調不良のため8~10日留まる。トルレスが回復した後、臼杵に修道院を建設するため、豊後に向かって出発する。 海路にて島原に立ち寄り、およそ8日間滞在する。当地の埋葬地が不足しているというキリスト教徒の訴えを聞き、埋葬地に適する地所を仙巖(有馬晴純)に請う。仙巖より3つの島を与えられる。高貴なキリスト教徒であるドン・ジョンの葬儀をトルレスの代わりにとり行う。		
		10月25日	福田からイエズス会修道士らに書翰を出す。		
			口之津に向けて出発。当地にいるトルレスのもとに滞在し、降誕祭を過ごす。		
		1月	口之津にて。トルレスの指示により、五島への派遣が決まる。約15日間、船の出帆を待つ。		41
		1月半ば	口之津を出発し、福田に1日滞在した後、五島に向かう。 海路で8日かけ、大值賀に到着する。宇久純定を訪問。		
		1月22日	大值賀にて。体調不良のなか当地の家臣たちに面会する。		
		2月5日	宇久純定に人を遣わし、家臣のみならず純定が説教に臨席すること、そのための場所を定めることを請う。		
			返答を得て、日本人修道士ロレンソとともに、純定の邸宅において400人以上の前で説教を行う。 説教の翌日、純定が熱病に罹ったことにより、仏僧から糸弾を受ける。多数の薬を所持しており治療の経験が豊富であること、脈と尿を調べる許可を得たい旨を、某貴人を介して純定に伝える。純定の尿が送られてきたので、彼に会いに行く。脈を取り、病気について説明する。薬の準備のため辞去する際に、服用の方法を説く。解熱の効用のある金を塗った丸薬3粒を純定に送る。次の日、純定の脈をとり、熱が下がったことを確認する。純定が再び頭痛を起こしたため、夜に彼のもとに行き、頭痛薬を作る。さらに翌日、純定の脈をとり、回復したことを伝える。純定より返礼を受ける。		
		2月24日	純定の妻、兄弟、息子をはじめ、多数の人びとの前で説教を行う。		
			純定の指の具合が悪くなため、彼の要請により薬を送る。 純定の伯母が重病に罹り、彼の懇願を受け、彼女に薬を与え回復させる。彼の娘や庶子・甥・兄弟にも薬による治療を施す。 純定より、教会のための地所をもらい、修道院建設の援助を得て、さらに教会における慈善事業のための寄附を受ける。 大值賀の退居に際して、洗礼式をとり行う。 奥浦の人びとの求めに応じ当地に向かう。純定の許可を得て、教会を建設する。		
永禄8年 /永禄9年	1566年	3月17日	島原のペルシヨール・デ・フィゲイレド司祭に書翰を出す。※9		
		6月24日	奥浦で、2度の洗礼式を行い、合計123人をキリスト教徒にする。		
			大值賀に赴き、25日間滞在。多くの人々に洗礼を授けるとともに、教会を建設する。 奥浦に戻るも、体調を崩す。松浦隆信がドン・アントニオ(籠手田安経)を司令官として200艘からなる大艦隊で来襲するとの報に接する。身体が衰弱しているなか山頂に避難する。トルレスが体調を気遣い、口之津に戻ることを指示する。 海路を進み福田に上陸する。ガスパル・ヴィレラ司祭に会い、彼とともに4日間滞在。 トルレスを訪ねるため、陸路により口之津に向かう。当地で20日間滞在。この間、島原の異教徒、および島原純茂からキリスト教への圧迫を受ける。トルレスの命により、志岐に向かう。		
		10月20日	志岐からイエズス会修道士らに書翰を出す。		
			志岐にて。志岐鎮経に洗礼名ドン・ジョンを与える。キリスト教徒にする。※10 鎮経の兄弟1人と甥たちをはじめとする約500人をキリスト教徒にする。		
		冬の初め	臼杵に教会と司祭館を建設するという <b>大友宗麟(義鎮)</b> の意向を実現するため、トルレスより豊後に派遣される。		
		1567年	トルレスの命で長崎に派遣される。	42	
		1568年	聖週間を口之津で過ごす。	43	
		7月	志岐にて。トルレスを中心として司祭と修道士が参集する協議が行われ、各人が駐在する場所が定められる。		
		10月20日	ドン・ペルシヨール・カルネイロ司教に書翰を出す。		
永禄10年 永禄11年	1569年		トルレスの指示により、志岐に派遣される。志岐に滞在し、若干の人をキリスト教徒にする。 四旬節の数日前、天草鎮尚の要請を受けたトルレスの指示により、天草に派遣される。河内浦で鎮尚に面会。到着して20日後、布教に関する5つの要求を鎮尚に承諾させる。鎮尚の臣民をはじめ570人をキリスト教徒にする。 ボルトガル船来航の候補地として、崎津を視察する。港の山上に木製の水槽2基、鉄製の小砲2門を設置させる。 鎮尚の兄弟および仏僧の妨害があったため、当地における布教を命じる書翰を認めるよう <b>大友宗麟(義鎮)</b> に依頼する。書翰にて宗麟の承諾を得るとともに、緞子三反を受け取る。鎮尚の兄弟たちから再び妨害があり、河内浦での布教が困難となつたため、トルレスのいる大村に向かう決心をする。 河内浦を出ると、鎮尚の兄弟たちが謀反を起こしたので、宗麟に書翰を送り、仲介を求める。 宗麟は鎮尚の兄弟宛の書翰と、鎮尚宛の書翰を認め、仲介に応じる。 宗麟のもとに向かい、トルレス宛の書翰を認めることを宗麟に請う。宗麟の好意に対する返礼として、イエズス会が有する寄附金を宗麟に送ることを案発する。	44	X Y
		10月22日	日田からニセヤのカルネイロに書翰を出す。		
		11月初め	ジョン・パウティスタ司祭とともに、口之津を発ち豊後に向かう。		
			高瀬に到着。 <b>大友宗麟(義鎮)</b> と大内輝弘を訪問するため、パウティスタと別れ日田に向かう。 4日後日田に到着し、宗麟に会う。トルレスの命により、輝弘のもとへ派遣される。道中の護衛のため、宗麟より一家臣と兵士30人を与えられる。 2日かけて輝弘の滞在地に到着する。トルレス宛の返書を預かり、別れる。 2日かけて秋月に到着し、秋月種実に会う。10日間滞在し、24人をキリスト教徒にする。 5日かけて豊後に到着。豊後にパウティスタとともに8日間滞在し、宗麟の居住する臼杵に向かう。 臼杵の教会を訪れ、10日間滞在。豊後の教会に赴く。トルレスの命で、パウティスタの代わりに豊後の教会に留まる。府内の高貴なキリスト教徒の埋葬をとり行う。宗麟が毛利元就との戦に勝ったとの知らせを受け取る。		

## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
永禄12年 /永禄13年 /元亀元年	1570年	2月初め	大友宗麟(義鎮)を訪ね、島津義久宛をはじめ書翰9通を認めてくれるよう、宗麟に依頼することをトルレスより命じられる。	45	
		2月15日	豊後を発つ。		
			3日かけて日田に到着。大友宗麟(義鎮)を訪問。宗麟、右筆に書翰を書かせ、署名を加える。秋月種実が宗麟に贈った掛け布を下賜される。 日田を発ち、種実の居所から5里の地に赴き、5日間滞在する。 秋月に出向き10日間滞在。種実の家臣30人をキリスト教徒にする。		
		3月19日	トルレスの滞在する大村に向かうため、秋月を発つ。		
		3月21日	高瀬に到着し、大村行の船に乗る。強風のため高瀬から3里の入り江に避難する。		
		3月22日	夜に改めて大村に向けて出帆する。夜半に有馬の海岸に到り、海賊船に遭遇。身に着けているもの全て奪われる。		
		3月23日	高瀬から5里の砂浜に打ち上げられる。寒さで瀕死の中、付近の漁師たちに歓待される。		
		3月24日	復活祭を口之津で行うため、同地に赴くことをキリスト教徒から請われる。同日夜、出発する。		
			夜半に口之津に到着する。下船後すぐに教会に向かい、フィゲイレードから迎えられる。		
		3月27日	口之津で復活祭に列席。		
	4月~		トルレスに会うため、口之津を発ち大村に向かう。 大村に到着。大村では戦が起きることが予想されるため、ドン・パルトロメウ(大村純忠)の要請により、トルレスは長崎の教会に向かう。トルレスの代わりに大村に留まる。15日後、トルレスの命で長崎の教会に赴く。 戦に際し教会を保護してもらうことを懇願するため、大友宗麟(義鎮)と軍の大将3人を訪問するよう、トルレスより指示を受ける。長崎を発ち、口之津に向かう。 口之津を出発し、高瀬に向かう。 高瀬から2日の道のりにある大友宗麟(義鎮)の滞在地に行く。トルレスへの返書、および護衛を付けることを命じる某武将宛の書翰を宗麟より受け取る。宗麟の家臣である武将と面会し、ドン・パルトロメウ(大村純忠)が宗麟を助力すると述べた旨を伝える。約3日間滞在し、多数の兵士に説教を行う。他の武将を訪問するため陣営を発つ。 秋月種実領内のキリスト教徒の集落に着き、約7日間滞在する。幾人かの異教徒をキリスト教徒にする。 宗麟の書翰と、軍の武将たちの書翰を人に託して、トルレスのもとに遣わす。 秋月から2日を要する位置にあるキリスト教徒の集落(博多近辺)に赴き、8人をキリスト教徒にする。キリスト教徒の島々を訪問するため、平戸に向けて出発する。 平戸にて。キリスト教徒の集落を多数巡り、たえず説教を行う。宗麟から書状が届き、フランシスコ・カブラル司祭を訪問するならば、城に立ち寄るよう請われる。カブラルの到着と宗麟の招待を受け、平戸を発つ。 3日かけて、宗麟の居所に行く。教会維持の俸禄に関するカブラル宛の書翰を宗麟から受け取り、カブラルがいる志岐に向かって出発する。 志岐にて。フロイスを除くすべての司祭が集まり、各司祭館における人員配置等についての協議を行う。協議の後、カブラルが諸教会を訪問するにあたり、その同伴者として指名される。 志岐を発ち、樟島に赴く。若干の異教徒をキリスト教徒にする。 志岐から福田を訪ねる。 福田から長崎の教会に到り、150人以上をキリスト教徒にする。 長崎から大村に行き、純忠を訪問する。 大村から口之津に向かう。※11 有馬義貞を訪問。 口之津から島原に移動。 島原から宗麟のいる地に赴く。 宗麟を訪問した後、秋月種実領のキリスト教徒を見舞う。 ついで博多に行き、およそ10人をキリスト教徒にする。 博多を発つ。キリスト教徒の某集落を訪れた後、平戸に向けて出発する。		
		10月15日	五島に向かう途上、平戸からイエズス会の司祭および修道士に書翰を出す。		
元亀2年	1571年		カブラルと博多で4日間滞在。若干の人をキリスト教徒にする。 天草鎮尚に請われ、カブラルと日本人修道士ヴィンセンテとともに天草(本渡)に滞在。※12 降誕祭を天草で過ごす。	46	
元亀3年	1572年		天草にて。降誕祭以後、700人を改宗させる。 教会の意向を無視する日本人通訳を、ドン・ミゲル(天草鎮尚)の賛同を得て追放する。 日本人通訳が志岐へ向かったため、ヴァスに注意喚起の書翰を出す。	47	
	10月5日		天草よりインド管区長アントニオ・デカアドロス宛に書翰を出す。		
天正3年	1575年		有馬にて。50人を改宗させる。 島原にて。70人を改宗させる。 口之津にて。島原にいる日本人青年パルトロメウが訪問してくる。島原で受けた迫害について相談を受ける。	50	
天正3年 /天正4年	1576年	1月31日	口之津より豊後の司祭宛に書翰を出す。	51	
			ガスパル・コエリュ司祭が有馬を治める東殿を仏僧から遠ざけるため、その交渉として東殿に銀を送るに際し、協力する。 口之津にて。大友宗麟(義鎮)の次男・親家がキリスト教徒となり、このことを知った有馬義貞がアルメイダを頼りに当地に来る。 洗礼を授けられたドン・アンデレ(有馬義貞)が有馬に移動し、その4・5日後にコエリュとともにアンデレを訪問。 有馬にて。アンデレが寺院と宿坊および仏僧の収入をイエズス会に与え、アルメイダに管理させることを打診するが、これを断り教会のみを建てる。		
		6月23日	口之津にて。アフォンソ・ゴンサルヴェス司祭の来航を出迎える。この2カ月で8000人以上をキリスト教徒にする。		
			天草久種が家臣と領民とともにキリスト教徒になることを決心したので、洗礼を授けるため天草に向かう。 カブラルの命でアントニオ・ロペス司祭とともに高来に送られる。※13 有馬にて。ドン・アンデレ(有馬義貞)が死去。彼の葬儀を見届ける。※14		
天正5年	1577年	1月2日	有馬にて。有馬鎮純から有馬の教会を退去するよう求められ、ロペスとともに口之津へ行く。	52	
			口之津にて。カブラルの指示で、幾人かのこどもたちに洗礼を授けるため、当地にひとりで残る。 有馬に行く。少年たちを大勢引きつれて、城の麓で詩篇や祈りを歌いながらキリスト教徒の埋葬を行なう。 カブラルの指示を受け、口之津から本渡に向かう。本渡で人びとに洗礼を授ける。 島津義久の要請を受けたカブラルの命で、ロペス・バルタザール司祭とヴァスとともに口之津から薩摩に向かう。※15 ※16		
天正6年	1578年		鹿児島に滞在し布教する。仏僧による妨害と自身の重病に苦しめられる。 薩摩から書翰を送る。 大友宗麟(義鎮)の日向出兵に伴い、宗麟より同行の指名を受けて、薩摩から臼杵に呼び戻される。	53	
		10月4日	ドン・フランシスコ(大友宗麟・義鎮)と妻ジュリアに同行するカブラルに従い、日本人ジョアンとともに土持領に向けて臼杵を出発する。		
			海路にて保戸を経由し、出発から2・3日後に土持に到着する。		

和暦年	西暦年	月日・時節	事 項	年齢	出典
天正6年	1578年	12月11日	病気のため務志賀付近に滞在。 <b>大友宗麟</b> の敗走を受け、豊後に向かう。	53	
			老齢と病気のためカブラルから駄馬を与えられ、宗麟より遅れて豊後に到着する。途上、フロイスと再会。		
天正8年	1580年		マカオにて。司祭に叙階され、ドン・ミゲル・ダ・ガーマの船で長崎に帰着。天草に赴く。	55	
天正9年	1581年末		長崎にて。アレッサンドロ・ヴァリニャーノ巡査が挙行した会議に参席。	56	
天正10年	1582年		病床にあるドン・ミゲル(天草鎮尚)に付き添う。鎮尚が死去し、葬儀を営む。 副管区長ガスパル・コエリュ司祭の命で薩摩に派遣され、島津義久に会う。鹿児島に滞在するための地所を与えられる。 仏僧の妨害に遭い、義久の命で薩摩を退去し、コエリュが滞在する高来に向かうとする。	57	
天正11年	1583年	10月	天草にて死去。司祭たちによって盛大な葬儀が営まる。	58	

(出典は「府内での出来事」に限る)

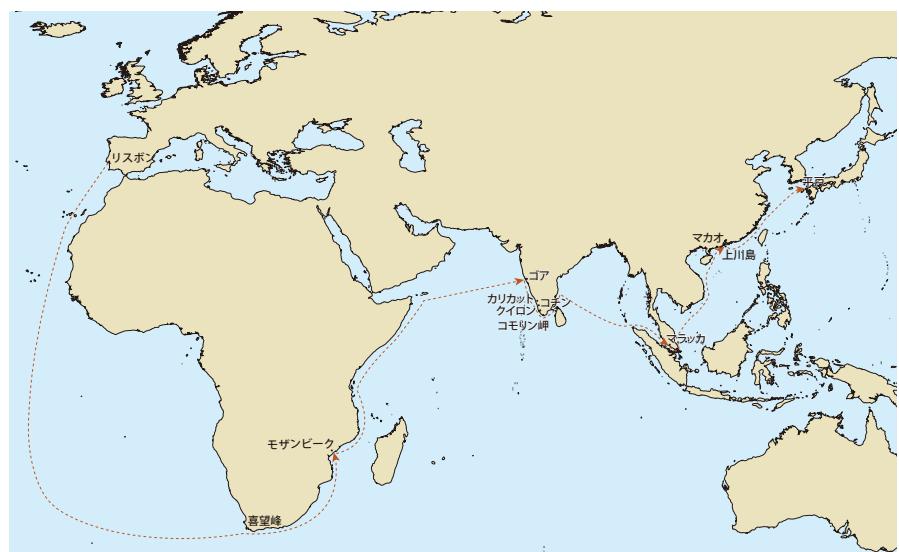
- ※1 海老澤有道「切支丹の社會活動及南蠻醫學」(富山房、1944年)を参照。
- ※2 この年、日本に来航したポルトガル商船は、ドゥアルテ・ダ・ガマの船のみであるが、その他私貿易の船は多く往来していたと考えられる。もしアルメイダがガマの船に同乗していたと推測するならば、上川を出発、8月14日に鹿児島に到着し、平戸に向かったことになる。
- ※3 1555年11月20日付のフェルナンデス・メンデス・ピントの書翰と、1555年11月23日付のメルシオール・ヌーネス・パレトの書翰には、彼らが乗る船がシンガポール海峡で座礁し、付近に停泊していたルイス・デ・アルメイダを船長とする船により救助されたことが記されている。また、パタニにて、アルメイダが現地の船の乗組員60人以上を殺害し、船を焼き払ったことが記録されている。さらに、1556年1月7日付のルイス・フロイスの書翰には、パレトとともに、広東に到り、捕囚解放に尽力したことが載る。これらの書翰に登場する船長・アルメイダと、本年表で扱うアルメイダを同一人物とみるか否かは、見解が分かれること。
- ※4 府内にはイエズス会の敷地が2か所あり、宣教師の書翰にはそれぞれ「上の地所」「下の地所」と表記されている。このとき、病院が建設されたのは「下の地所」にあたり、1553年に大友義鎮(宗麟)から与えられた土地である。同時に十字架を立て、教会も建設したとみられる。なお、「上の地所」は1556年にイエズス会が購入した土地で、「下の地所」に隣接し、同年11月1日、200人以上が収容できる教会が建設されたと記録されている。1557年10月29日付ガスパル・ヴィレラの書翰、1559年11月1日付バルタザール・ガーゴの書翰、および鹿毛敏夫「大友義鎮—国君、以道愛人、施仁發政」(ミネルヴァ書房、2021年)を参照。
- ※5 1560年1月15日付メルシオール・ヌーネス・パレトの書翰に、アルメイダについての言及がある。この時期、中国の商品を日本で交易し、司祭たちの運営費にあて、日本語をすでに解していたと記されている。
- ※6 1561年10月8日付ファン・フェルナンデスの書翰、およびフロイス「日本史」第1部30章では、キリスト教徒にしたのは60人である。
- ※7 ローマ・イエズス会文書館の古写本に記載された日付を採用した。なお、「エヴォラ版日本書翰集」には「11月12日」とあり、書翰の日付が異なる。
- ※8 このとき、二条邸・百万遍知恩寺・大徳寺を見学したと推定される。五野井隆史「ルイス・フロイス」(吉川弘文館、2020年)を参照。
- ※9 1566年3月17日付アルメイダ書翰について、松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第3巻は「平戸より」と表題をつけており、アルメイダがこの時点で平戸にいるように読める。しかし、同年10月20日付アルメイダ書翰において、アルメイダが伝聞として平戸に関する同様の情報を記しているため、アルメイダ自身は平戸には行っていないと判断される。
- ※10 1567年10月13日付アリレス・サンシェスの書翰では志岐鎮経が洗礼を受けたのは9月と記すが、同年10月20日付アルメイダの書翰の追記には、この書翰を認めた後で志岐鎮経が受洗した旨が記されているため、鎮経の受洗は10月20日、あるいはその直後と考えられる。
- ※11 『日本史』第1部92章によれば、カブラルは大村の後に鈴田村を訪れている。アルメイダも同地に同行していたと推定されるが、自身の書翰では鈴田訪問について言及していない。
- ※12 1571年9月22日付カブラルの書翰によれば、本年、カブラルは豊後、志岐にも訪問している。これらの行程にアルメイダが同行していた可能性は高いが、推測にとどまる。
- ※13 天草と高来いずれを先に訪れたかは不詳。
- ※14 1577年9月1日付フランシスコ・カブラルの書翰によれば、有馬義貞の死去は聖アンドレアの祝祭から約22日後のこと、すなわち1576年12月下旬であると読める。
- ※15 ルイス・フロイス「日本史」第2部37章には、山川港に滞在していたとの言及がある。
- ※16 このときヴァスは、16年前にアルメイダが洗礼を授けた守将と会っており、アルメイダも同席した可能性はある。

## 出典文献

- A・史料編纂所 2000『譯文編二(下)』書翰90  
 ·史料編纂所 2000『譯文編二(下)』書翰91  
 ·史料編纂所 2000『譯文編二(下)』書翰92  
 ·史料編纂所 2000『譯文編二(下)』書翰95  
 ·史料編纂所 2011『譯文編三』書翰101  
 B・史料編纂所 2011『譯文編三』書翰106  
 C・史料編纂所 2011『譯文編三』書翰107  
 D・『日本史』第1部19章  
 E・史料編纂所 2011『譯文編三』書翰122-A  
 F・史料編纂所 2011『譯文編三』書翰127  
 G・史料編纂所 2011『譯文編三』書翰125  
 ·史料編纂所 2011『譯文編三』書翰125-A  
 H・史料編纂所 2018『原譯文編四』書翰147  
 ·史料編纂所 2022『原譯文編五』書翰150  
 I・史料編纂所 2018『原譯文編四』書翰147  
 J・史料編纂所 2022『原譯文編五』書翰162  
 K・史料編纂所 2022『原譯文編五』書翰162  
 L・史料編纂所 2022『原譯文編五』書翰162  
 M・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 N・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 O・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 P・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 Q・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 R・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 S・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 T・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 U・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 V・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 W・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第2巻  
 X・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第4巻  
 Y・松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第Ⅲ期第4巻

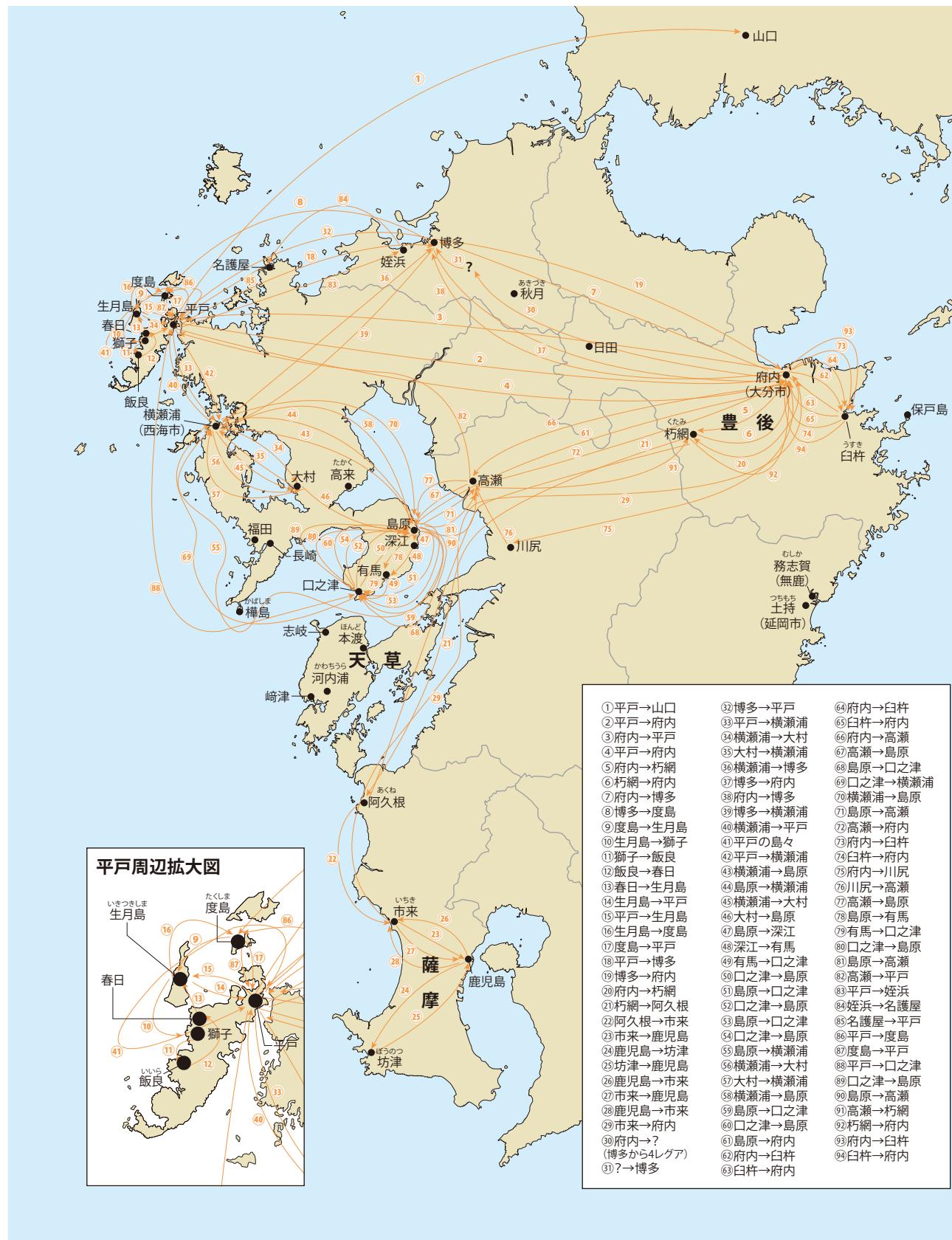
## アルメイダ関連航路図

### Nautical Charts of Almeida's Route



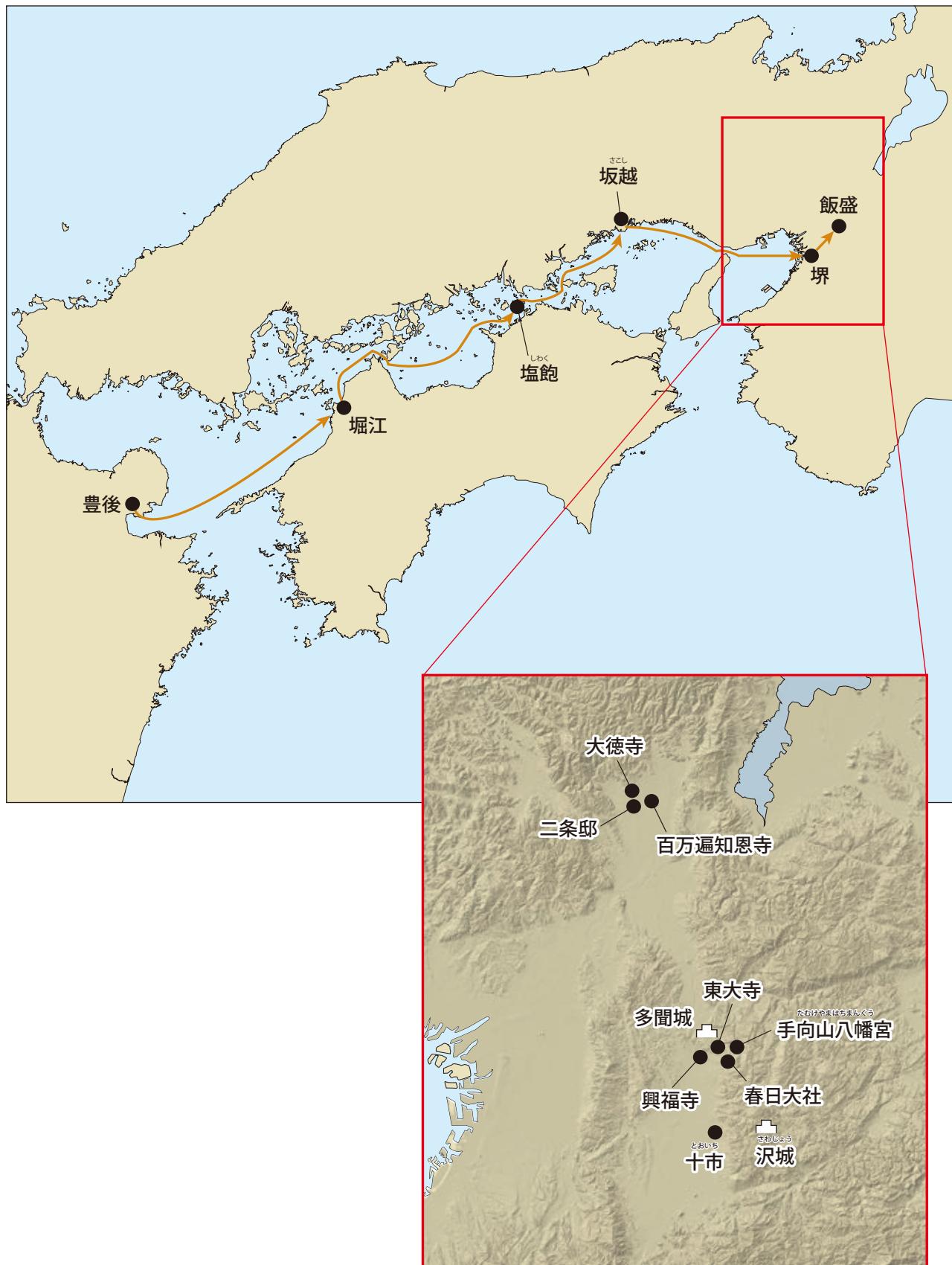
アルメイダ行程概念図【1552～1564年】

Conceptual Diagram of Almeida's Itinerary (1552-1564)



## アルメイダ行程概念図【1564～1565年】

Conceptual Diagram of Almeida's Itinerary (1564-1565)

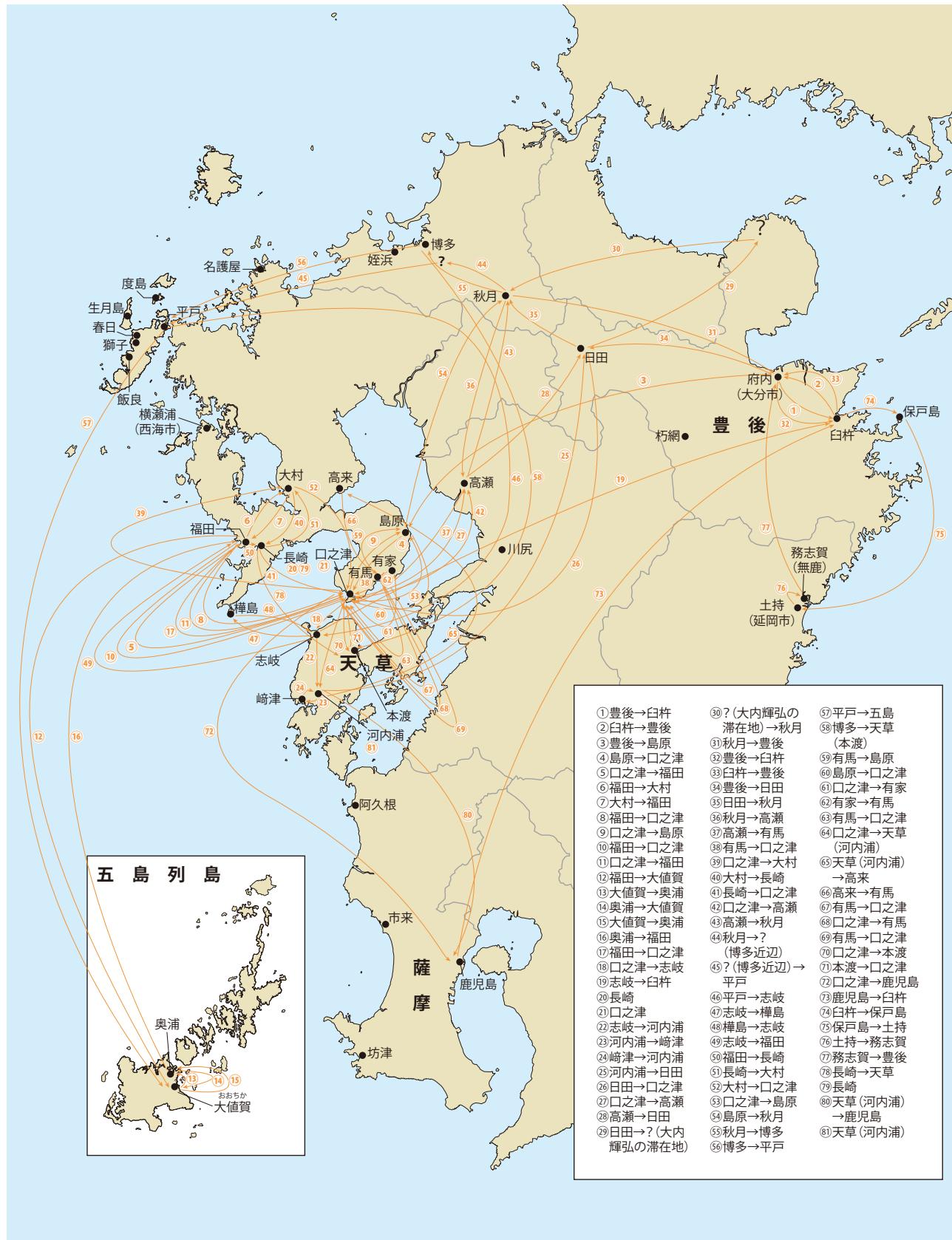


## 第4部 アルメイダ関係資料 — 豊後府内(大分)編 —

Session 4: Almeida-Related Materials —Bungo Funai (Oita) Edition—

## アルメイダ行程概念図【1565～1583年】

## Conceptual Diagram of Almeida's Itinerary (1565-1583)



# FUNAI JUNIOR GUIDE FUNAI ジュニアガイド

大友氏を中心に、大分の歴史の魅力を発信する  
大分市の公式こどもガイドです。

イベントで訪れた方などへ、大友氏に関する遺跡や  
歴史、文化についてガイドを行っています。  
歴史大好きなこどもたちが、楽しくわかりやすく  
ご案内します！

ぜひガイドを聞いてみませんか？



## ジュニアガイドの声

ガイド活動では、大分の歴史の知識が深まるだけでなく、  
お客様から「ありがとう」と言ってもらえることにやりがいを感じます。  
何より新しいことに挑戦することが以前より楽しくなりました！

「西洋医術発祥の地おおいた」の魅力再発見  
**ルイス・デ・アルメイダ**  
**生誕500年記念フォーラム 資料集**

編集・発行/大分市教育委員会 文化財課  
発行日／令和7(2025)年11月23日

確認印

主 催：大分市・大分市教育委員会  
共 催：東京大学史料編纂所・科学研究費基盤研究B 16世紀西日本港町の構造と相関  
－文献・考古学資料の国際・横断的分析による－  
後 援：大分県・大分県教育委員会・国立大学法人大分大学・公立大学法人大分県立看護科学大学  
日本外科学会・大分市連合医師会・大分日本ポルトガル協会・大分合同新聞社  
NHK大分放送局・OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送  
J:COM大分ケーブルテレビ・エフエム大分  
後援・協力：(公益財団法人)大分県芸術文化スポーツ振興財団



ルイス・デ・アルメイダ  
生誕 500 年記念